

# スミソニアン研究機構所蔵の 幕末日本関係コレクション

ペリー・ハリス・遣米使節団

19th Japan-related Collection of the Smithsonian Institution:  
Perry, Harris, and the First Japanese Mission  
FUKUOKA Mariko, HIDAKA Kaori, SAWADA Kazuto

福岡万里子・日高 薫・澤田和人

## はじめに

執筆代表者（福岡）は、2018年10月31日から11月2日にかけて、東京大学史料編纂所教授横山伊徳氏、大阪市立大学彭浩氏、そして万延元年遣米使節団子孫の会の方々とともに、ワシントンDCのスミソニアン研究機構と国立公文書館を訪問し、両機関に所蔵される幕末日本関係史料を実見調査する機会を得た<sup>(1)</sup>。本稿は、その際のスミソニアン研究機構における調査成果に、帰国後、美術史を専門とする当館の教員、日高薫・澤田和人の協力を得るとともに、福岡自身の追加調査による知見も加えて、可能な限りの加筆を行い、とりまとめたものである。

スミソニアン研究機構 Smithsonian Institution での調査は、具体的には、同機構の博物館サポートセンター Museum Support Center の国立自然史博物館人類学部門に所蔵される、万延元（1860）年に遣米使節団が米国政府に贈った贈答品を中心的対象として行った。加えて、同じ範疇の分類の下に見出された初代駐日米領事タウンゼント・ハリスに由来する染織品（将軍下賜の時服と見られる）についても、機構の収蔵庫内で熟覧して調査を行う機会を得た。さらにその際、同じ収蔵庫内に、ペリー艦隊招来の日本コレクションが多数収蔵されていることも知り、その一端について若干の写真撮影を行うとともに、機構の研究者から情報提供を得た。本稿では、これらの調査成果を、帰国後の追加的調査で得られた知見と統合して紹介する。なお下記では、調査の本来の重点とは逆となるが、史料群の年代を考慮し、ペリーの日本コレクション、ハリス由来の染織品、遣米使節団の贈答品の順に取り上げる。

これらの史料群をめぐる研究史を簡単に振り返っておく。ペリー日本コレクションについては、これまでに日本の調査チームが二度、調査対象としている。管見の限り、最初の系統的調査は、当館の元館長・土田直鎮及び元教授・岡田茂弘が研究代表者を務めた科研費（国際学術研究）「19世紀収集のスミソニアン研究機構所蔵日本関係資料の調査研究」（1990～92年度）において行われた。このプロジェクトでは、歴博の教員（上記二名の他、岩井宏實、高橋敏、宇田川武久、丸山伸彦）と、スミソニアン研究機構側で研究分担者を務めたチャンサー・ハウチンズ Chang-su Houchins 女史とが協力して、ペリーコレクションの調査を一通り行ったようである<sup>(2)</sup>。しかし管見の限り、その成

果は刊行された形では残っていない。その後、上記のハウチンズ氏が、同コレクションの網羅的な目録と解説をまとめ、1995年に英語で刊行した<sup>(3)</sup>。その後、国立民族学博物館の元教授・近藤雅樹が研究代表者を務めた科研費（特定領域研究）「19世紀における日本在外博物学・民族学標本コレクションの実態調査」（2002～2005年度）でも、ペリーコレクションは調査対象の一つとされて<sup>(4)</sup>いる。おそらくその成果を反映し、同コレクションのごく一部は、2008年に江戸東京博物館で開催された特別展「ペリー&ハリス～泰平の眠りを覚ました男たち」において、日本に招来され展示<sup>(5)</sup>された。

こうした経緯はあるものの、スミソニアン研究機構のペリー日本コレクションの知名度は、少なくとも日本の歴史学界では、総じて非常に低いように思われる。例えばペリー来航に関する代表的な研究では、一行が形成した日本コレクションについては言及が<sup>(6)</sup>ない。幕末外交史を専門とする福岡及び横山伊徳氏も、今回の遣米使節贈品調査の折に初めてその存在を知った。過去の日本調査チームによる調査では、管見の限り、スミソニアン研究機構での調査成果が、少なくとも日本側では、まとまった形で残されずじまいに終わったことが、こうした状況の一因となっているように思われる。そこで本報告では、調査で行い得たのは短時間の概要把握ではあれ、ハウチンズ氏の詳細カタログ・解説に基づくコレクションの概要紹介や、関係史料・文献の照合に基づく追加的発見事項の指摘などを行い、この状況に多少なりとも一石を投じられればと思う。

ハリス由来の染織品は、彼が江戸城に登城して将軍に謁見した際、将軍から拝領したものが、本国に送られ、スミソニアン研究機構に所蔵されるようになったものと見られる。これに関しては管見の限り、国内外で紹介がなされたことがない。上述の歴博・民博の科研プロジェクトにおいても、調査対象からは漏れていたようである。本稿では、福岡が実見調査で作成した記録とメモ写真、同機構の目録を、当館の染織を専門とする美術史研究者・澤田和人に提供し、専門的知見に基づく史料情報をまとめてもらった。これに、福岡の方で追加調査した関連史料の情報を統合した上で、紹介することとしたい。

スミソニアン研究機構所蔵の遣米使節団の贈答品（以下、贈品とする）については、刊行された形で一定の研究史がある。その嚆矢は、戦前に、田中一貞編『万延元年遣米使節図録』（丸善、1920年<sup>(7)</sup>）において、同機構に当時見出された贈品の一部（馬具類、蒔絵火鉢三脚など）の図版と、使節団員の日記に見られる関連情報の一部が紹介されたのにさかのぼる。その後、雑誌『太陽』特集259号「贈り物繁盛記」において、「日本外交史を彩る贈答品」中の「大統領へのプレゼント」として、カメラマン柴田一良氏により撮影された贈品の一部の写真（翠簾屏風二扇、蒔絵火鉢三脚、馬具類－鞍鐙・泥障・肌付・力革－、螺鈿の柄杓－後述のように馬具の一部－）が、遣米使節団派遣の経緯の簡単な解説とともに紹介された<sup>(8)</sup>。研究史上、最も充実した考察は、榊原悟『美の架け橋』において行われている<sup>(9)</sup>。同書では、遣米使節団の贈品が、江戸時代の日朝間の善隣外交で徳川将軍から贈られた一連の贈答品の系譜の延長に位置づけられ、幕末期にオランダやイギリス、フランス等に贈られた贈答品と並んで紹介された。贈品の準備過程についても、掛物を中心的対象として、考察が部分的に行われている（主な依拠史料は後出の『大日本史料 幕末外国関係文書』）。その後は、山田久美子「アメリカに渡った掛物絵」が、やはり贈品中の掛物に焦点を当て、副使・村垣淡路守の「航海日記」などを参照し、アメリカに渡った掛物の行方を追った<sup>(10)</sup>。

しかしこれまでに管見の限り、スミソニアン研究機構に所蔵される実際の贈品について、詳細な調査記録がまとめられ、紹介されたことはない。本稿では、福岡が実見調査で作成した記録とメモ写真を、帰国後、邦訳した同機構の目録と共に、当館の漆器を専門とする美術史研究者・日高薫に提供して吟味してもらい、贈品中の漆器を中心として、専門的知見を大幅に加筆して、新たな目録情報をまとめてもらった。これをまずは紹介したい。

さらに遣米使節団の贈品が準備される過程について、従来の研究では、刊行史料（『幕末外国関係文書』<sup>(11)</sup>及び『幕末外交史料集成』の該当巻）を元に、部分的にその経緯が言及されてきたに留まり、刊行史料の典拠となった「<sup>(12)</sup>亜行御用留」にさかのぼって、贈品の準備・選定過程の全体像が明らかにされることはなかった。本稿ではそれも試みたい。それにより、本来贈品として予定された品々と実際に贈られた品々の相違や、さらに実際の贈品と現在スミソニアン研究機構で認知される贈品との相違一すなわちいずれの贈品が現在行方不明なのか一なども、判明するであろう。これらは、今後の発展的調査のための基礎情報となるはずである。

## 1. ペリーの日本コレクション

### 1-1 スミソニアン研究機構に収蔵された経緯

ペリー艦隊が米国に持ち帰った日本コレクションは、大部分が当初、米国政府がそれまでに実施していた他の様々な遠征が収集した博物学的コレクションと共に、<sup>(13)</sup>パテント・オフィス Patent Office という施設に収蔵された。なお1854年10月9日付の米国海軍長官宛て書翰でペリーは、「日本の皇帝〔将軍〕からの様々な品物」は「大部分が大統領邸に送られるべきものである」と記していることから、ホワイトハウスに受け入れられた資料もあった可能性があるが、裏付ける記録がなく、<sup>(14)</sup>詳細は不明なようである。ところでこの時期は、博物学研究の一大拠点として、スミソニアン研究機構がワシントンで発足する時期と重なっていた。すなわち同機構は、イギリス人科学者ジェームズ・スミソンの莫大な寄付金を元に、「人類の知識の増進と普及を目的とした機関」として、1846年8月10日付の米国議会条例によって発足し、その後1858年までに、博物学の研究室や化学実験室、図書室、講義室、博物館等を擁する初代の建物（スミソニアン・ビルディング）がワシントンに完成した。<sup>(15)</sup>こうした中、パテント・オフィスに納められていたペリー遠征を含む米国の探検遠征の収集コレクションは、1857年、スミソニアン研究機構に移管されることとなり、実際の収蔵場所も1858年、新しいスミソニアン・ビルディングに移された。かくしてペリーの日本コレクションは、創設間もないスミソニアン研究機構が、その草創期に受け入れた初めての大規模な民族学資料群の一翼を構成することとなった。<sup>(16)</sup>なお1857年にペリーコレクションがスミソニアン研究機構に受け入れられた際の台帳では、ちょうど同年にシャム国王から米国大統領に贈られた贈呈品も、この日本コレクションの中に誤って登録されたらしい。<sup>(17)</sup>その後、このシャム・コレクションは然るべく弁別され、1997年にはそれらの資料群を出品して、スミソニアン国立自然史博物館で展示“Treasures of Two Nations”<sup>(18)</sup>が行われた。

1860年、後述する万延元年の遣米使節団は、ワシントン滞在中、このスミソニアン・ビルディングを訪れ、館内の博物館で、当時展示されていたらしいペリーコレクションを目にしている。例えば勘定組頭支配普請役益頭尚俊の従者として使節団に参加していた蘭学者の佐野貞輔は、その訪

米日記に、「悉く我が邦の物品のみを置き、先年水師提督ペルリに賜はりたる無紋の熨斗目、婦人の打掛・白無垢の下着等、衣服の類を多く集む。又他の一所に刀剣等の類を集め、長刀・白鞘の新身、其の外農具の内鋏・鋤などこれあり<sup>(20)</sup>」と記す。また学問所勤番として、林大学頭の支配下で昌平坂学問所の事務を担当していたこともある森田清行は、勘定組頭として使節団の随員となり、その「亜行日記」に次のように記している。

#### 【史料1】

ヘルリ日本エ相越候節持帰りシ由ノ品ニハ種々ノ品アリ、郡内緋ジマ反物凡百反程、其余縮緬ノ類、絵半切、箱入大工道具、蛇ノ目傘、蓑ノ類ナリ、大黒天木像宮エ入レシアリ、奉書小札ニ使節エ松崎満太郎トアリ、是ハ拙ガ知ル処ノ御儒者ナリ、ヘルリ渡来ノセツ下田エ御用ニテ相越<sup>(21)</sup>、

引用中に見える松崎満太郎は、ペリー再渡来の際、上司の林大学頭とともに応接掛に任命され、下田での日米条約交渉に立ち会った儒者であり、森田の知己であった。

その後、博物学を母胎として、民族学や人類学といった新しい学問分野が分岐発展していった世界的な時代潮流とともに、スミソニアン研究機構においても、1880年代に民族学部門が発足し、次いで1897年にはそれを包摂する形で人類学部門が形成された。こうした中、ペリーコレクションは、この人類学部門 Department of Anthropology の民族学分野 Division of Ethnology の下に組み込まれることとなり、現在に至っている。物理的な収蔵場所としては、かなりの変遷があった。上述のように当初、パテント・オフィスに収蔵され<sup>(22)</sup>、次に初代のスミソニアン・ビルディングに収蔵・展示されたペリー・コレクションは、その後さらに三度の引っ越しをした。すなわち1881年、スミソニアン研究機構の下に最初の国立博物館 U.S. National Museum の建物<sup>(23)</sup>が建てられると、ペリーコレクションは、他の米国学術遠征コレクションとともにこの場所に移された。その後、博物館収蔵品の拡大とともにこの建物が手狭になってくると、国立博物館の新しい建物を建設する機運が高まり、1911年にこれが完成し<sup>(24)</sup>、ペリーコレクションはさらにここに移された。ハウチンズ氏がコレクションの調査を行い1995年に解説・詳細カタログ *Artifacts of Diplomacy* を刊行した当時は、資料群はこのワシントン DC 中心部の建物にあったようである。しかしこの場所も1980年代までには手狭となり、増大する博物館コレクションの収蔵と資料保存・研究のラボの空間を確保するため、1983年、ワシントン郊外のメリーランド州 Suitland に博物館サポートセンターが建てられた<sup>(25)</sup>。ペリーコレクションはやがてここに移されたようで、2018年秋に執筆代表者（福岡）らが調査を行った際は、資料群はこのセンターの収蔵庫内に見出された。

## 1-2 ペリー日本コレクションの内容と由来

さて、このスミソニアン研究機構に収蔵されるペリーの日本コレクションは、どのような資料を含んでいるのであろうか。ハウチンズ氏のカタログに基づき、まずはその大まかな全体像をつかんでみたい。同カタログは、ペリー・コレクションの下に分類された資料群（計130点）<sup>(26)</sup>について1～130の通し番号を振り、図版とともに、各資料の詳細な記述を行っている。資料の分類と、カタログ内で資料に振られた通し番号、各分類の下の資料が扱われているページ数を書き出すと、以下の通りになる。なお目録では、分類自体には番号が振られていないが、ここでは便宜的に番号を振っ



た (①～⑩)。

【ペリーコレクション中の資料分類】

- ① 漆器類 (Lacquerware) (Nr.1-16) pp.14-31
- ② 染織品, 紙類 (Textiles and Paper) (Nr.17-26) pp.32-52
- ③ 陶磁器 (Ceramics) (Nr.27-46) pp.53-67
- ④ 扇・団扇, 傘, 煙管 (Fans, Umbrellas, and Tobacco Pipes) (Nr.47-59) pp.68-87
- ⑤ 図画 (Graphics) (Nr.60-69) pp.88-94,
- ⑥ 竹細工, 木工品, 藁・繊維製品 (Bamboo, Wood, Straw, and Fiber Products) (Nr.70-106) pp.95-106
- ⑦ 金属製品 (Metalware) (Nr.86-121) pp.107-111
- ⑧ 刀剣・武器類 (Swords and Arms) (Nr.93-96) pp.112-115
- ⑨ 道具類 (Tools) (Nr.97-121) pp.116-126
- ⑩ その他 (Miscellany) (Nr.122-130) pp.127-135

それぞれの分類品目の下に具体的にどのような資料があるか, カタログ中の資料表記 (英語, 日本語) に基づき抽出すると, 以下のようになる。

【各分類における資料内訳】

- ① 漆器類: 吸物椀, 塗皿椀, 汁椀, 料紙箱, 硯箱, 飯箱 (原文 *meshi-bako*<sup>(ママ)</sup>), 手箱, 弁当箱
- ② 染織品, 紙類: 絹布 (琥珀平織横縞, 格子縞, 羽二重, 縮緬), 綿布 (型染), 帯 (博多織), 模様刷便箋, 五色奉書紙, 美濃紙
- ③ 陶磁器: 花瓶 (布志名焼), 茶瓶, 菓子鉢 (有田焼), 盃, 茶器, 水差し, 灯籠 (有田焼), 茶碗, 猪口, 水鉢 (有田焼), 植木鉢, 大皿 (伊万里焼, 染付)
- ④ 扇・団扇, 傘, 煙管: 扇子 (墨絵)<sup>(27)</sup>, 団扇 (錦絵)<sup>(28)</sup>, 蛇の目傘, 煙管八本
- ⑤ 図画: 瓦版「ペリリ像」, ハイネ画「江戸付近の村」, 写生画 (「日本の役人」, 「日本の女性」, 「琉球の女性」, 「日本の武士」, 「蝦夷のアイヌ」, 琉球の役人), 瓦版「嘉永改正泰平安民鑑」, 瓦版 (久里浜に上陸するペリー一行と黒船, 江戸湾の防御態勢を図解報道)
- ⑥ 竹細工, 木工品, 藁・繊維製品: 竹小筒, 孫の手, 按摩器, 筆, 筆立て, 籠, 神棚, 小箱 (寄木細工), 駒下駄, 蓑, 箒, 棕櫚毛
- ⑦ 金属製品: 卯焼, 釜, 鉄瓶, 銚子, 五徳, 神鏡 (「安芸国石田郡祇園社神鏡」), 釣鐘, 脇差, 長刀 (長刀袋付), 槍 (刀止め付)
- ⑧ 道具類: 鑿, 鑿の刃, 鑿柄, 釘, 鉤, 錐, 銅蝶番, 鉋の刃, 鉋, 鋸, 包丁, 鋏先, 鋤の先, 鋏, 鎌
- ⑨ その他: 人形 (御所人形, 三折人形, 伏見人形), 匙 (法螺貝製), 硯石, 書籍 (「寛政改正孟子 道春点」)<sup>(29)</sup>, 「供給品目」, 「贈物表札」<sup>(30)</sup>

なおハウチンズ氏がペリーコレクションの調査を行った当初, 後述で見る万延元年遣米使節団が招来した米国政府宛て贈呈品も, 多くはこのコレクションに含まれて登録されていたらしい。彼女の調査を通じて弁別が行われ, 関係資料の照合を通じてペリーでなく遣米使節団由来と判断されたものは登録替えがなされ, 現在, The First Japanese Mission Collection の下に含まれている (3-2

参照)。

次に、それぞれの資料に関する記述内容を見る。ハウチンズ氏のカタログでは、130点に分けられたそれぞれの資料について、スミソニアン研究機構における従来の資料番号 (USNM ECC72, NMAH-DT E4077 等) と寸法を表記した上で、モノの記述 (Description), 特徴 (Characteristics), 備考 (Remarks), 同様のその他の資料 (Additional Specimens, ある場合のみ) を、丹念に書き込んでいった形となっている。備考欄にはしばしば、資料の由来に関するハウチンズ氏の推定が、米国側・日本側の関係する文献史料と照合した上で書き込まれ、また目録の刊行時 (1995年) までにおけるその資料の展示歴が、判明した限りで記録されている。以下、具体例として、幾つかの資料の記述を翻訳して紹介しよう。

【資料の記述内容の例】

①漆器類より

1. 漆塗りの蓋付き椀 lacquered covered bowl (*suimonowan* 吸物椀)

USNM ECC 6

H (高さ) : 8.4 cm, D (直径) : 11.5cm

記述 : 黒漆, 円錐形の木製スプ椀, 蓋・脚部 foot rim 付き

特徴 : 金銀の消粉蒔絵(その他の多様な蒔絵装飾と基本的用語については小松 1975 : 86<sup>(31)</sup>を参照)によるアザミのデザインが蓋と椀の片側を装飾している。椀の内側は朱塗りで、椀と蓋の縁は金漆。

備考 : この椀はおそらく下田で購入された。AWL (Appendix V 参照<sup>(32)</sup>) を受けた SML<sup>(33)</sup>には、「秋草之模様吸物椀六拾人前」の品目が見出される。この椀は、1969年ニューヨークの Japan Society で展示され、1978年ワシントン DC における National Portrait Gallery の展示 “Mission to Japan” でも紹介された。

同様のその他の資料 : ECC7 は蓋欠, ECC13 は蓋欠, ECC14 は椀欠 (揃いで残っているのは2点)。全て寸法は上記の例と同様。

②染織品, 紙類より

20. 絹 Silk (*kempu; kinu*)

NMAH-DT E4077, E4078 (original nos. ECC 232. 233)

W: 15.0 cm, L: 2 rolls (1 roll = ~ 3 yards)

記述 : 薄く柔らかな羽二重, 紬とも呼ばれ, 中国に由来する絹紬の織物 pongee fabric of Chinese origin。

特徴 : E4077 は朱色の染織 ; ECC E4078 は生成り色 (ナチュラルホワイト)。羽二重の手触りの良さは、いわゆる穀織 “*kome-ori*” - 綾織りの一種 - の結果である。薄く絹のソフトな風合いから、羽二重は、儀礼衣装, 女性服, 特別に華美な衣装の裏地などに、幅広く使われた (様々な用途については NKDJ [日本国語大辞典], 1976, 16 巻, p.406 参照)。幕府は 1854 年 3 月に神奈川で、米国とペリー提督にそれぞれ、紅羽二重を 20 反, 白羽二重を 5 反, 贈っている。周知のように、衣服 - 特に絹 - の贈呈は儀礼的な重要性があ

る（資料 Nr.17 参照）。

備考：これらの二巻 two rolls の絹織物は〔関係資料で〕様々に言及されている。例えば HNL, PJJ (Appendixes I, II 参照) では“pongee”と記され、NGL<sup>(34)</sup>では羽二重, HL (Hora, 1970: 241-242)<sup>(35)</sup>では繭紬“kenchu”, KORL<sup>(36)</sup>では光絹と記されている。これらは 1859-ACB, 1953-AL, USNM-ECC では単に“silk”と記され、NMAH-DT 目録では“plain silk”<sup>(37)</sup>と表記された。

### ③陶磁器より

29. 磁器製菓子鉢 Porcelain cake jar (*kashi-bachi*)

USNM ECC 107

H: 17.5 cm, D: 26 cm

記述：染付の有田焼で、焼き菓子や砂糖菓子、飴などを入れる蓋付きの磁器製鉢。

特徴：円筒形の本体には、せり出した脚部と、浅い受け皿を裏返したような形状で突き出した縁がある蓋が付いている。外側は飛ぶ鶴をかたどったデザインの紋様で装飾されている。鶴は長寿を表す吉祥の象徴である（日本における鶴の意匠の様々な類型については特に Edmunds, 1934:316-317; Dower, 1971:90-91 を参照）。やはり染付で描かれた、様式化された幾何学的な波の紋様が、脚部のすぐ上の下部（本体の三分の一程度）を覆っている。

備考：これはおそらく、1854年6月に下田で井戸・伊澤<sup>(38)</sup>から贈られた七つの染付磁器の一つと見られる（KORL の記録で「青花瓷器“shino usuwa”<sup>(39)</sup>」）。本品は1968年、スミソニアン研究機構がワシントン DC で開催した“The Japan Expedition 1852-1855 of Commodore Matthew Calbraith Perry”で展示された。

以上の資料記述に垣間見えるように、本目録では、ペリーコレクションを構成する資料の由来について、日米の同時代の関係史料に見出される品目リスト（日本／琉球側の贈品目録や引き渡し品目録、対応する米国側の受領品目録や購入品目録など）を可能な限り網羅的に参照し、これらと実際の資料の特徴を照合した上で、それぞれの資料の由来を推定している。目録の巻末には付録 Appendixes が付され、参照された日米の同時代の品目リストのうち、紹介に値するものと判断されたリストの内容が、日本語目録は英訳された上で、参照できるようにしてある（Appendix I-V, VII）。これと並んで、スミソニアン研究機構民族学部門の1953年作成のペリーコレクション資料リストも収載されている（Appendix VI）。

付録の内訳は、邦訳すると以下の通りである。

#### 【ハウチンズ氏カタログの付録の内訳<sup>(40)</sup>】

I. 「1854年3月24日に日本政府から受領された品物のリスト」（典拠：ホークス編ペリー遠征公式記録<sup>(41)</sup>）[HNL: Hawks' Narrative list]

II. 「日本の「皇帝 Emperor」[将軍]とその高官から米国政府ほかのために受領された贈品のリスト」（典拠：ペリーの個人的日誌<sup>(42)</sup>）[PJJ: Perry Journal list]

III. 「1854年6月9日に下田で日本側応接委員から米国遠征団に贈られた贈品のリスト」（典拠：

- 
- 林大学頭燿著「墨夷応接録」<sup>(43)</sup> [KORL: Kokui osetsuroku list]<sup>(44)</sup>
- IIIA. 「1853年6月8日に那覇で贈られた公式の琉球贈品のリスト」(典拠:「ペリー艦隊沖縄来航関係薩摩藩那覇在番奉行届書」<sup>(45)</sup>) [HL: Hora Tomio's list]<sup>(46)</sup>
- IIIB. 「1854年7月11日に那覇で米国遠征団に贈られた公式の琉球贈品のリスト」(典拠:「ペリー艦隊沖縄来航関係薩摩藩那覇在番奉行届書」<sup>(47)</sup>) [ibid.]
- IIIC. 「嘉永六年五月十二日〔1853年6月18日〕に那覇でペリー提督に贈られた公式の琉球贈品のリスト」(典拠:東京大学法学部所蔵「旧琉球藩評定所書類」中「亜人成行御国許え御届之扣」<sup>(48)</sup>) [OSL: "Okinawa-ken shiryō" list]
- IIID. 「安政元年六月十七日〔1854年7月11日〕に那覇でペリー提督に贈られた公式の琉球贈品のリスト」(典拠:東京大学法学部所蔵「旧琉球藩評定所書類」中「亜人成行御国許え御届之扣」<sup>(49)</sup>) [Ibid.]
- IV. 「ジェイムズ・モロウ博士により購入された品物のリスト」(典拠:モロウ博士の日記)<sup>(50)</sup> [ML: Morrow List]
- V. 「アメリカ人が希望した品物のリスト, 1854年5月24日に応接委員が老中に提出」(典拠:「町奉行書類所収外国事件書」<sup>(51)</sup>) [AWL: American Want List]<sup>(52)</sup>
- VI. 「1953年の登録リスト(民族学部門) - 日本の「皇帝 Emperor」〔将軍〕からマシュー・C・ペリー提督へ贈られた贈品のリスト, 1859年5月」(典拠:国立自然史博物館登録局, 登録簿 Nr.199043) [1953-AL: 1953 Smithsonian Institution Accession list]
- VIII. 「1854年5月13日に陸に運ばれた米国の贈品のリスト」(典拠:ペリーの個人的日記)<sup>(53)</sup>
- VIII. 「〔1853～54年に那覇・江戸湾・下田で〕琉球王国の太后・布政官兩人・総理官, 及び日本政府の個々の役人に贈られた米国の贈品のリスト」(典拠:ウィリアムズの日記)<sup>(54)</sup>
- IX. 「目録に登場する」日本人の個人名リスト

このうち I, II, IV, VII, VIII は、ペリー遠征中に得られた公式・非公式の贈品や購入品(日本側では「譲渡品」「引き渡し品」)に関するペリー一行側のリストであり、III, IIIA～D, V は日本側(幕府、琉球王国、薩摩藩)のリストとなっている。カタログを編むに当たりハウチンズ氏が参照した史料は、米国側史料ではこの他、スミソニアン研究機構で作成された新旧の史料リスト(台帳)があり、日本側史料でも、上記以外に参照されている刊行史料がある(Appendix で挙げられていないものを含めて、ハウチンズ氏が参照した日本側史料を、下記【ペリー日本コレクションの構成資料の主な推定由来一覧】の脚注で一覧できるようにした)。ハウチンズ氏のカタログが、広範なサーベイに基づき編まれていることが分かる。

執筆代表者(福岡)はこれまでに、ハウチンズ氏が参照した同時代の史料目録のうち、日本側史料の目録の原文に一通り目を通し、また同氏のカタログにおいて、資料1～130の資料記述のうち、特に資料の由来に関する部分を通覧した。それに基づき、ハウチンズ氏が調査・推定した限りでの、ペリー・コレクションの資料群の推定由来を年代順に整理すると、以下のようになる。それぞれにつき、対応する同時代の日本側目録を、脚注に表記した。



【ペリー日本コレクションの構成資料の主な推定由来一覧】

1. ペリー艦隊が第1回日本来航に先立つ琉球訪問の際、那覇で嘉永六年五月〔1853年6月〕に琉球王国政府から送られた公式の贈品<sup>(55)</sup>。
2. ペリー艦隊の第2回日本来航時の安政元年二月〔1854年3月〕、横浜での応接交渉・日米和親条約調印に際して贈られた、幕府から米国政府・ペリーらへの公式の贈品<sup>(56)</sup>。
3. 安政元年五月〔1854年6月〕、ペリー艦隊が条約調印後に下田に来航して条約付録を交渉・締結した際に、幕府側応接委員からペリーらに贈られた贈品<sup>(57)</sup>。
4. ペリー艦隊側から提出された希望品リスト<sup>(58)</sup>を踏まえ、安政元年（五月?）に下田でペリー側に代価を得た上で引き渡された品々<sup>(59)</sup>。
5. ペリー艦隊随員の科学者 Morrow らが箱館・下田で（箱館・下田奉行所を通じて?）購入した品々（前掲 Appendix IV 参照）
6. ペリー艦隊が第2回来航時の琉球訪問の際（琉米条約を調印）、那覇で安政元年六月〔1854年7月〕に琉球王国政府から送られた公式の贈品<sup>(60)</sup>。
7. ペリーらが1853年から54年にかけて日本（浦賀、横浜、下田、箱館）や琉球を訪問した際の様子に、接触のあった日本人（又は琉球人）から贈られた非公式の贈呈品、ないし箱館や下田などの市場で非公式に入手した品々

19世紀に外国に渡った日本の資料で、個別の資料レベルで、双方の側にここまで文献史料が残っている状況は、かなり稀有なものと考えられる。ペリー来航中、事実上の「鎖国」状態が続いていた日本では、日本人とペリーらとの間の接触や物品のやり取りは、極めて限定され、高度の警備体制が敷かれ、管理された状況下で行われざるを得ず、それは対外関係が薩摩藩の実質的な統制下に置かれていた琉球王国でも、大なり小なり同様であったろう。まさにそれ故にこそ、双方の物品のやり取りは、丹念に記録され、文献史料に残されたものと考えられる。なお、7の非公式な形で贈られた品物については、日本側の史料は（さしあたり）残っていないが、これについても、ペリー一行側の記録で言及が残っていることがあり、カタログではそれらも踏まえて、資料由来の推定がなされている。

1-3 日本側史料と実際のモノ資料の照合例

それでは、日本側の史料では例えば、どのような記録が残っているのでしょうか。その一例として、試みに、2の横浜での日米和親条約調印の際に幕府から米国政府・ペリーらへ贈られた公式の贈呈品目録を、『幕末外国関係文書』第5巻151号から引用してみよう。

【史料2】

亜美理駕統領え被下もの

梨子地蒔絵松竹梅

一 料紙硯箱 一通

黒<sup>(ママ)</sup>鑲色蒔絵桐に鳳凰

一 机 一脚

---

同銀金具吉野山絵

一 書棚 一架

同花の丸

一 広蓋 一組

蒔絵銀地墨竹（○陣営日記ニハ、「蒔絵竹ニ雀」トアリ、）

一 花生 壺

卓共

黒蒔絵四季折枝銀ホヤ

一 手焙 壺対

金銀丑花籠

一 置物 壺

卓共

一 紅羽二重 十疋

一 白羽二重 十疋

一 紋縮緬 五疋

一 板メ縮緬 五疋

同使節へ

黒蒔絵獅子（○陣営日記ニハ、「黒塗蒔絵瀧ニ獅子」トアリ）

一 料紙硯箱

一 紅羽二重 三疋

一 白羽二重 二疋

一 紋縮緬 二疋

一 板メ縮緬 三疋

船将初九人へ

一 紅白羽二重 三疋ツゝ

一 板メ縮緬 二疋ツゝ

通弁官へ

一 板メ縮緬 三疋

惣士官五十六人へ（○陣営日記ニハ、「五六十人程え」トアリ）

一 吸物椀 十人前ツゝ

乗組惣中へ

一 米 二百俵 五斗入

一 鶏 三百羽

右伊勢守殿御指図、

<sup>(61)</sup>  
〔中略〕

---

このうちハウチンズ氏のカatalogで実際の資料と比定がなされている主なものを数点挙げるとす



図1 Nr.9 “lacquered stationary box”  
(スミソニアン国立自然史博物館データベース)  
E71-0, © Department of Anthropology,  
Smithsonian Institution

れば、以下がある。

※「亜美理駕統領」〔米国大統領〕へ（将軍から）贈られた料紙硯箱

…カタログ資料番号 Nr.9 “lacquered stationary box” (USNM ECC71) (図1)

※米国大統領，使節（ペリー），船将らに贈られた紅白の羽二重

…Nr.20 “Silk (thin and soft *habutae* 羽二重)” (NMAH-DT E4077, E4078)

※米国大統領，使節（ペリー）に贈られた紋縮緬，板メ縮緬

…Nr.21 “Silk (Silk *chirimen* 縮緬)” (NMAH-DT E4103-E4106)

一方，スミソニアン研究機構所蔵のペリー日本コレクションに含まれていないため，ハウチンズ氏のカタログでは言及がないが，【史料2】の贈品目録中2点目・3点目にある，将軍から米国大統領へ贈られた「黒鑑色蒔絵桐に鳳凰」の机，「同銀金具吉野山絵」の書棚は，現在ホワイトハウスに所蔵されている文机・違い棚<sup>(62)</sup>に比定できるのではないかと考えられる。

ペリーが招来した日本コレクションの一部がホワイトハウスに収蔵されたかどうかについては，史料<sup>(63)</sup>的裏付けが見当たらないらしく，当時の詳細は今のところ不明である。しかし上記の比



図2 文机（ホワイトハウス所蔵）  
© White House Historical Association



図3 違い棚（ホワイトハウス所蔵）  
© White House Historical Association

※図版は全て文末にカラー図版掲載。

定が正しいとすれば、これらは「亜美理駕統領え被下もの」として、然るべき場所に収蔵されることになったわけである。

加えて先に、万延元年遣米使節団の随員・森田清行がスミソニアン博物館を訪問した際に「大黒天木像宮エ入レシアリ」を目にし、付属する奉書小札に「使節エ、松崎満太郎トアリ」と記録していることに言及した（p.X4【史料1】参照）。これはハウチンズ氏のカタログ pp.100-101 にある、木像の大黒天を中に配した神棚2点のいずれか（Nr.77, 78 の“Family Shinto altar (*kamidana*)”（USNM ECC 302; 303））に比定できるのではないかと（図4）。ただし同氏はこれらにつき、「この神棚は1854年6月に下田でジェイムズ・モロウ博士によって購入された」と比定している。史料的根拠はモロウ博士の日記に記録された箱館・下田での購入品リスト（Appendix IV）で、同リストには“Three Household shrines”があり、これを言っているものと見られる。<sup>(64)</sup>



図4 Nr.77 “Family Shinto altar”  
（スミソニアン自然史博物館データベース）  
<http://n2t.net/ark:/65665/39d62c7c2-8714-4953-a870-651b089c11ce>  
E302-0, © Department of Anthropology,  
Smithsonian Institution

ハウチンズ氏のカタログは、実際の資料と内外の文献史料を照合した広範で綿密な調査に基づいており、極めて貴重であることを前提としつつ、こうした例に垣間見られるように、改善の余地がありそうな箇所も存在する。上述のように、当該資料群は、日米の同時代の史料で丹念なドキュメンテーションが残っている稀有な在外日本コレクションであり、また幕末の徳川外交の最初期の実践の一面を鮮やかに今に伝える資料群と言える。米国側研究者による調査の到達点は既に示されており、今後は日本の専門家たちによる本格的調査と活用が俟たれている。

## 2. ハリス由来の染織品

第二章では、スミソニアン研究機構に所蔵される幕末日本関係コレクションとして、“Townsend Harris Japan Collection”と名付けられる染織品を取り上げる。これは、初代米国駐日総領事（後に弁理公使）タウンゼント・ハリスがその日本滞在期間中、江戸城で将軍に謁見した折に拝領物として下賜された「時服」ではないかと考えられる。ただしハリスは、その足かけ5年にわたる滞日期間中（1856年9月～1862年4月）、計6回、江戸城に登って将軍に拝謁している。そのいずれの際に拝領したものかは、即断しがたい。さしあたり本稿では、彼の初めての将軍謁見を試みに取り上げ、その際の時服拝領の経緯や、彼がそれを米国へ向けて発送した経緯などについて、確認できる記録を整理した上で、スミソニアン研究機構に現在見出されるハリス日本コレクション資料の調査報告を掲げる。

### 2-1 初回将軍謁見時の時服拝領と送付の経過

周知のように、ペリーが幕府と結んだ日米和親条約の規定（の米国側解釈）に基づき、条約調印後18ヵ月以降に下田に派遣されることになった「合衆国官吏の者」として、ハリスは1856年8月



末に下田港に到来した。彼はその後、交渉を通じ、1857年6月17日（安政四年五月二十六日）に下田約条をまず調印するとともに、同年秋までに、江戸参府への許可を幕府から取り付け、12月7日（安政四年十月二十一日）、江戸城で將軍に謁見し、米国大統領から託されていた將軍宛て親書を奉呈した。この謁見の際の様子は、ハリスの日記や國務長官宛て書翰に詳しく記されている<sup>(66)</sup>。それによれば、謁見が済んだ後、隣接する間に彼は案内され、外国掛老中堀田備中守正睦を初めとする「国家枢密院 Council of State」の面々と改めて対面し、そこで「大君からの贈り物」として、15領の絹織物を授けられた。ハリスの日記は、その際の模様を次のように記す。

### 【史料3】

堀田備中守は、国家枢密院を代表し、私の到着と謁見について私に祝辞を述べ、次いで、陛下が私に贈り物をするように命ぜられたと言って（その贈り物は既に、その部屋にあった）、三つの大きな進物台を指し示した。それらにはいずれにも、真綿の厚く入った絹服 silk kabyas<sup>(67)</sup>が五領ずつ載せてあった。

日本側の史料では、その際の様子が次のように記録されている（温恭院御実紀）。

### 【史料4】

其後大目付案内せしめ、下田奉行差添、使節、二之間御敷居内え罷出、通弁官は同書御敷居外え罷出、拝領物、時服十五、白羽二重、紅白浅黄散し染八、紅紗綾二、白綸子一段、熨斗目二、右使節え、右御品々西之御縁より進物番持出之、二之間中央ニ置之、拝領物被仰付之旨、備中守申達之、使節進て拝戴、退き御礼申述<sup>(68)</sup>、

ただし上記では、時服の内訳がやや不明瞭である。そこで、より明確な史料として併せて、『大日本維新史料稿本』安政四年十月二十一日条収録の「海防秘聞録」に見出される時服の明細の記録を引いておこう<sup>(69)</sup>。

### 【史料5】

	紅白浅黄ちらし	八ツ	
	紅綾織	式ツ	
時服十五	段熨斗目	式ツ	使節え
	白綸子	壹ツ	
	白羽二重	式ツ	

この將軍謁見後、ハリスはそのまま江戸で、修好通商条約を結ぶための交渉を行うことになる。紆余曲折の交渉の結果、1858年7月（安政五年五月）には日米修好通商条約が調印され、その後相次いで、オランダ・ロシア・イギリス・フランスの修好通商条約が結ばれた。こうした経過を経て、ハリスは1859年1月14日（安政五年十二月十一日）、再び下田から國務長官カス宛てにつづった書翰で、將軍謁見の日に贈られた絹織物のことを取り上げ、その米国への送付法や形状について、次のように述べている。

### 【史料6】

1857年12月10日付の私の江戸発公信第26号で、私は、〔將軍への〕謁見の後、15領の絹の部屋着 silk robes を贈られたことを述べました。贈呈品に関する國務省の訓令に従い、私はこれらの着物（二つの箱に入れました）を米国に送るつもりです。ただしこれらを直接米国に送

る機会はしばらくの間なさそうですので、まず上海に送り、そこからニューヨーク行きの船に載せて同港の〔米国政府の〕集荷人に引き渡してもらえよう、指示したいと思います。箱は長官宛てとしております。この着物の素材は価値が低いですが、真綿が厚く詰められており、これは軽く、温かく、しなやかで、もつれることがなく、その点で木綿に遥かに勝っています。<sup>(70)</sup>

その後下田には、同年2月中旬（安政六年一月）、日英修好通商条約の批准書交換のため来日した英国軍艦インフレキシブル号が寄港した。これはハリスにとり、この間に書きためていた国務長官宛て報告書翰34通を含め、発送を要する物を日本から送り出せる半年ぶりの機会となり、彼はこの際に、時服の入った箱もようやく発送できた模様である。<sup>(71)</sup>

## 2-2 ハリス「時服」の調査報告

スミソニアン研究機構の自然史博物館人類学部門に収蔵される「タウンゼント・ハリス日本コレクション」は、9点の着物から成る（E-14178-0;E14179-0;E14180-0;E14181-0;E14181-1;E14181-2;E14183-0;E14184-0;ET9042-0）。便宜的に、9点の資料に①～⑨の番号を振る。そのうちには状態の悪いもの、似通った絵柄のものが複数あり、時間の制約もあって、2018年秋の調査では、それらを除いた合計4点の着物（③・⑦・⑧・⑨）を選んで、収蔵ケースから出してもらって熟覧調査し、スケッチや計測、写真撮影を行った。他のものについては、ケースに入ったままの状態でも写真撮影を行った。帰国後は、熟覧調査をした4点の着物（E14180-0;E14183-0;E14184-0;ET9042-0）に関する調査記録を、染織史を専門とする澤田和人に提供し、専門的知見をまとめてもらった。

以下では、これらにつき、機構側の目録情報をまず確認した上で、調査時に撮影したメモ写真と、各資料に関する澤田の専門知見を、熟覧調査をした資料に重点を置いて、資料番号順に掲載する（【調査記録】）。また①～⑨を初回登城時の拝領時服の内訳（【史料4・5】）と照合してもらい、史料上の名称と符合するものがあれば、その旨を※印で追記してある。最後に、資料に関する澤田の総合的所見を記載した。

### 【機構側の目録情報】

ハリスコレクションに関する機構側の目録情報は、9点の資料について、資料番号（Catalog number）と収蔵場所番号（Storage location）以外は共通しており、例えば1点目のE14178-0の目録情報は以下の通りである。

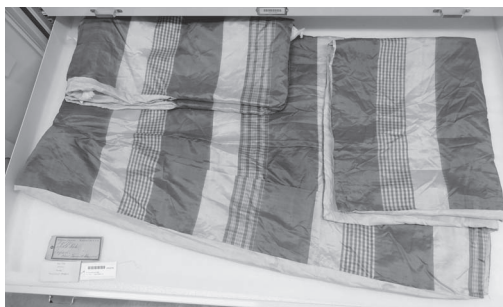
Catalog number	E14178-0
Number of parts	1
Storage location	1321C01807
Index term	Robe
Object name	Silk robe
Techniques	Textile
Culture	Not Given
Locality	Japan
Collector	Townsend Harris

---

Date Collected	1856-1862
Accession number/date	000000 /
Donor	Accession Number Unknown
Online record	<a href="http://n2t.net/ark:/65665/32ca035ac-4579-4f39-8757-b5fb4c81ae61">http://n2t.net/ark:/65665/32ca035ac-4579-4f39-8757-b5fb4c81ae61</a>

このように、資料の収集者はハリス、その収集時期は1856～62年（ハリスの日本滞在期間）と登録されているが、資料がスミソニアン機構に受け入れられた際の登録番号等は記録がないようで不明である。

【調査記録】（写真はいずれも福岡撮影） ※図版は全て文末にカラー図版掲載。



① E14178-0

※【史料5】に言う「段熨斗目 弍ツ」のうちの一つか。



② E14179-0

※【史料4】に言う「紅紗綾 二」の一つか（【史料5】では「紅綾織 弍ツ」と表記）。



③ E14180-0

名称：七宝鉄線模様夜着

材質・技法：紅平絹・染

法量：丈（襟を含む）165.0 cm, 衿 77.9 cm, 衽下がり 42.0 cm, 襟幅 21.3 cm

※【史料5】に言う「紅白浅黄ちらし 八ツ」が「紅地・白地・浅黄地で散し模様」の意味であれば、そのうちの一つか。

---

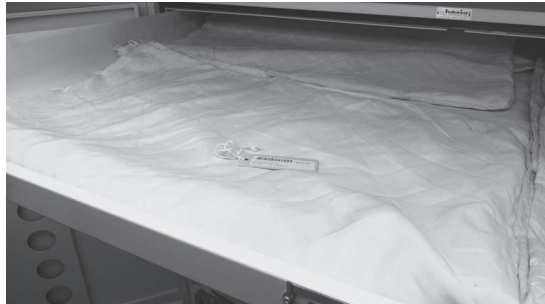
④ E14181-0

※同じく「紅白浅黄ちらし ハツ」の一つか。



⑤ E14181-1

※【史料5】に言う「白羽二重 弔ツ」のうちの一つか。



⑥ E14181-2

※同じく「白羽二重 弔ツ」のうちの一つか。



⑦ E-14183-0

名称：縞模様夜着

材質・技法：縞織練緯・締切拵

法量：身丈 158.2， 衿 85.9 cm，

袖丈 61.0 cm， 袖幅 41.0 cm，

衿下がり 45.0 cm， 襟幅 17.0 cm

※【史料5】に言う「段熨斗目 弔ツ」のうちの一つか。







⑧ E14184-0

名称：筏桜唐草模様夜着

材質・技法：浅葱紗綾・染

法量：身丈 161.2 cm， 衿 77.4 cm， 袖丈 70.0 cm， 袖幅 37.0 cm， 襟肩あき 16.0 cm

※【史料5】に言う「紅白浅黄ちらし 八ツ」が「紅地・白地・浅黄地で散し模様」の意味であれば、そのうちのの一つか。



⑨ ET9042-0

名称：中啓牡丹唐草模様夜着

材質・技法：白紗綾・染

法量：丈（襟を含む） 171.0 cm， 衿 85.0 cm， 袖丈 72.0 cm，  
前身幅 40.1 cm， 衿幅 14.4 cm， 衿下がり 40.0 cm，  
襟幅 17.0 cm

※同じく「紅白浅黄ちらし 八ツ」の一つか。

【総合的所見】

大きさと形状からみて、熟覧調査の対象とした③・⑦・⑧・⑨は全て夜着である。他の資料も、みな夜着である可能性が高い。中でも③・⑧・⑨に使われている生地は、オランダなどにいくつか伝来しているヤボンセ・ロッケン（男性用室内着）と同類であり、近世期に西洋人に人気のあった日本の染織品として大いに注目される。国内では、類例の夜着を所蔵している公的機関は、歴博と共立女子大学博物館ぐらいを数える程度と少なく、貴重なものである。

これらの資料は、【史料4・5】に引いた時服の内訳と照らし合わせた場合、ハリスが初度の將軍謁見の際に下賜された時服と見て、まず間違いないと考えられる。ただし留意すべき点がある。形状からして、ハリス日本コレクションの染織品は、通常の小袖ではなく、夜着であることは確実である。夜着は言わば布団であり、通例は「時服」とは呼ばないように思われる。夜着は普通の小袖よりも大きいことを考え合わせると、日本人より体格のよい西洋人のために、本来は夜着であるものを、時服（小袖）に転用した可能性があるかもしれない。ハリスコレクションの夜着は、通常よりも中に入れる綿の量が少ないように見受けられるが、西洋人向けの小袖として扱ったとすれば、このことについても合点がいく。

### 3. 万延元年遣米使節団の贈答品

第三章では、スミソニアン研究機構所蔵の第三の幕末日本関係コレクションとして、“First Japanese Mission Collection”（第一日本使節団コレクション）と名付けられる資料群を取り上げる。ハリスが幕府と結んだ日米修好通商条約では、その条約批准書の交換について、「日本政府より使節を以て亜米利加華盛頓府に於て本書を取替すへし」（第14条）とされていた<sup>(72)</sup>。それを受け、批准書交換のため幕府が米国へ派遣したのが万延元（1860）年の遣米使節団であるが、本コレクションには、この使節団が持ち渡った米国政府への贈品としてスミソニアン研究機構で認知されているものが収められている。そのうち大部分は、当時の米国大統領ジェームズ・ブキャナンに贈られたと見られる贈品で、一部が国務長官ルイス・カスへ贈られたものと見られている。

そこで本章ではまず、遣米使節団が1860年の米国訪問の際に持ち渡った大統領宛ての公式・非公式の贈呈品の内訳を、日本側史料から整理した上で、機構側で「第一日本使節団コレクション」として認知されている資料群との対応関係を見てみたい(3-1)。次に資料群のモノとしての情報を、現段階で分かっている限りでとりまとめ紹介する(3-2)。最後に、東京大学史料編纂所所蔵外務省引継文書「垂行御用留」を中心的史料として、これらの贈品が幕府内で準備された過程の一部始終をまとめる(3-3)。以上を通じ、今後の関連する発展的調査のための基礎情報を提供したい。

#### 3-1 大統領宛て公式贈品の内訳

万延元年の遣米使節団が持参した米国大統領宛て贈品は、3-3で後述するような準備過程を経て、以下のような内訳のものとなった（米国国立公文書館に残る献呈の際の目録〔図5／史料7〕を引く<sup>(73)</sup>）。これらは、将軍徳川家茂の名において米国大統領ジェームズ・ブキャナンに贈られた公式の贈品となる。

##### 【史料7】

太刀	二振
馬具	一揃
掛物	十軸
翠簾屏風	五双
緞子幔幕	二張
大和錦	十卷
書棚	一架
料紙硯箱	一組

以上

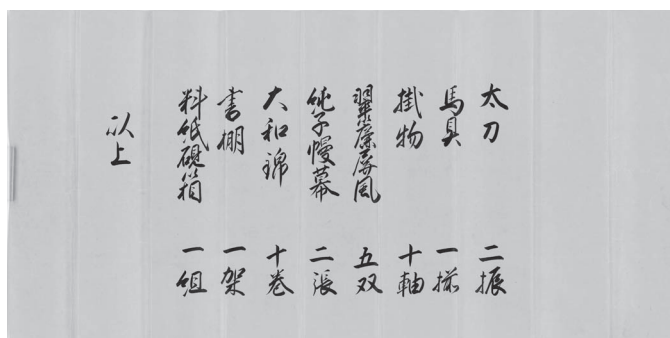


図5 米国大統領への贈品目録（米国国立公文書館データベース）  
<https://catalog.archives.gov/id/6883719>

これ以外に、正使・副使の新見・村垣・小栗が大統領に初めて謁見した際に贈るものとして、（おそらく個人的に）準備した品物に、以下のものがある。<sup>(74)</sup>

##### 【史料8】

蒔絵火鉢	三ツ
同食籠	壺対



図6 「大統領に献じたる掛物」(国立国会図書館デジタルコレクション『万延元年遣米使節図録』)  
<https://dl.ndl.go.jp/infondljp/pid/1920856>



図7 蒔絵火鉢三脚と蒔絵食籠一対?  
 (スミソニアン図書館デジタルコレクション)  
<https://doi.org/10.5479/sil.976321.39088016526683>

大和錦 五巻

以上のうち、現在スミソニアン研究機構において遣米使節団に由来する贈品 (First Japanese Mission Collection) として認知され所蔵されているのは、公式贈品のうちでは馬具 (鞍, 鐙, 泥障, 切附, 力革, 三尺革, 柄杓), 翠簾屏風 (一隻), 書棚 (一架) があり, 私的な贈品のうちでは, 「蒔絵火鉢」(三脚) に相当すると見られる資料がある。この他, 【史料1】の大統領宛て贈品とは別に, 国務長官 (ライス・カス) 宛てに贈られた馬具 (鞍, 鐙) と見られている資料もある。

以上が, 遣米使節団が招来した贈品として, 機構側で認知され収蔵されている資料である。これらを上記で見た日本側史料の大統領宛て贈品の品目と対照すると, 公式贈品では太刀 (二振), 掛物 (十幅), 緞子幔幕 (二張), 大和錦 (十巻), 料紙硯箱 (一組), 私的贈品では蒔絵食籠 (一対), 大和錦 (五巻) は, 行方不明ということになる。スミソニアン研究機構に所蔵されていても, 万延元年遣米使節団の贈品として認知されず, 他のコレクションに混在している可能性もあるのかもしれないし, 他館や個人の所蔵であったり, あるいは失われた可能性も考えられる。

なお行方不明の贈品のうち, 掛物二幅及び蒔絵食籠については, これらを写したものである可能性が極めて高い図版が残っているので, ここに転載しておく。掛物二幅は, 田中一貞編『万延元年遣米使節図録』(丸善, 1920年)の後半に, 図版五八「大統領に献じたる掛物」として掲載される(図6)。後述と照らし合わせると, 遣米使節が持参した大統領宛て公式贈品の掛物十幅のうち, 狩野探原筆『墨絵鶴図』と住吉内記筆『菊に小鳥図』と見られる。

蒔絵食籠一対は, 図7において, スミソニアン研究機構に現在も残る蒔絵火鉢三脚の背後に描かれているのが, それに当たると考えられる。これは, アメリカ合衆国建国百年を記念して1876年に開催されたフィラデルフィア万国博覧会の記念図録に収録される図版である。同図録の同じページには, スミソニアン研究機構に現在所蔵される大統領宛て贈呈品と見られる馬具類の図版も掲載される(図9参照)。<sup>(76)</sup>



### 3-2 「第一日本使節団コレクション」の資料情報

次に、機構側で遣米使節団招来の贈品として登録されている資料群のモノとしての情報を、現段階までに分かる限りでとりまとめて紹介する。その際にはまず、スミソニアン研究機構国立自然史博物館人類学部門の目録で登録されている資料情報を下敷きとし、これを邦訳して、2018年秋の福岡による調査記録・メモ写真とともに日高薫に提供し、これらを元に、資料の物理的特徴に関する所見を、機構目録の記述を抜本的に拡充・修正する形で、まとめてもらった。これを各資料の【所見】として掲げる。一方、機構目録の備考欄に元々記してあった、機構内の資料管理の経緯などに関わる情報は、【機構備考】として残した。各資料の冒頭で、□で囲って示した番号は機構内の資料番号 (Catalog Number) であり、以下、部品数 (Number of parts), 所蔵場所 (Storage location), 資料種類 (Index term), 資料名 (object name), 素材 (Material type (s)), 技法 (Techniques), 文化 (Culture), 場所 (Locality), 収集時期 (Date Collected), 受入番号・時期 (Accession #/ date), 寄贈者 (Donor), が続く。これらは、機構の目録に元々あった情報を基礎とするが、そのうち資料種類、資料名、素材、技法については、日高の専門知見に基づく加筆修正が加わっている。また法量も、福岡の調査記録に基づき日高が追記した。

なお2018年秋に実地調査した際、特に漆工品は、経年劣化と乾燥により、漆が部分的に剥げたりひびが入ったりして、修復を要するものが少なからず見受けられたことを付記する (例えば図18 図版の蒔絵書棚, 上面端を参照)。

E322-0

部品数	3
所蔵場所	1343C00602
資料種類	Brazier [火鉢]
資料名	牡丹蒔絵螺鈿火桶
素材	金属 [金・青金カ]; 木材; 漆; 貝
技法	蒔絵; 螺鈿
文化	日本
場所	日本
収集時期	1860
受入番号・時期	60A00001          1860
寄贈者	最初の日本遣米使節 ジェイムズ・ブキャナン大統領
法量	径 29.0 cm    高さ 22.0 cm



図8 牡丹蒔絵螺鈿火鉢 (スミソニアン国立自然史博物館データベース)  
<http://n2t.net/ark:/65665/3lcf6f252-6169-4475-9ab5-793fa51192ea>  
E322-0, © Department of Anthropology, Smithsonian Institution

#### 【所見】

木製漆塗の火桶で、三脚、円筒形、取り外し可能な銅製の内炉付き。装飾は、沃懸地に薄肉高蒔絵・付描・描割などの蒔絵技法、及びとても薄い貝による螺鈿、金貝、切金などの技法による。胴部に大きく牡丹文を表わし、口縁部には三種類の花文と七宝文を描いた方形の文様を並べ、さらに雷文





図9 遣米使節団招来の贈品と見られる資料  
(スミソニアン図書館デジタルコレクション)  
<https://doi.org/10.5479/sil.976321.39088016526683>

で縁取る。身込上部にも渦巻き状の文様を表わす。猫脚は梨地、猪目透かしを施した持送りは沃懸地とし、それぞれ十六弁の菊花文を配する。三角形の地板は木地を活かして拭漆仕上げとする。

【機構備考】

- ※ 参考文献〔未詳〕で言及されているように、324と同じセット。
- 本品は上の絵の左側のもので、下の絵では下の列の右側のものである。
- ※ 1973年4月10日：これら3つの火桶はおそらく、1860年の最初の遣米日本使節団の第2メンバーによるジェイムズ・ブキャナン大統領への贈り物のように思われる。(R. Elder)
- ※ Chang-su Houchins (アジア民族学専門家)により、最初の日本使節団のものとして認定される(1985年10月5日)。
- ※ この火桶は、Frank H. NortonとFrank Leslieによる1877年本のp.252の下に掲載される版画(図7、図9)で、下の列の中央に見えるものであるように思われる。

E323-0

部品数	3
所蔵場所	1343C00602
資料種類	Brazier〔火鉢〕
資料名	葡萄蒔絵螺鈿火桶
素材	金属；木材；漆；貝
技法	蒔絵；螺鈿
文化	日本
場所	日本
収集時期	1860
受入番号・時期	60A00001 1860
寄贈者	最初の日本遣米使節 ジェイムズ・ブキャナン大統領
法量	径 29.0 cm 高さ 22.3 cm



図10 葡萄蒔絵螺鈿火桶 (スミソニアン国立自然史博物館データベース)  
<http://n2t.net/ark:/65665/3a23c9ff4-2b6d-4bbb-ad83-cbc230e60cb1>  
E323-0, © Department of Anthropology, Smithsonian Institution

【所見】

木製漆塗の火桶で、三脚、円筒形、取り外し可能な銅の内炉付き。装飾は、沃懸地に薄肉高蒔絵・付描・描割などの蒔絵技法、及びとても薄い貝の螺鈿による。胴部は葡萄の文様を表わしてその上下に唐草文を施した帯を巡らす。口縁部には三種類の花文と七宝文を描いた方形の文様を並べ、さらに雷文で縁取る。身込上部にも渦巻き状の文様を表わす。猫脚は梨地、三角形の地板は木地を活かして拭漆仕上げとする。

【機構備考】

※ 324と同じセット。参考文献参照：これは下の絵の下の列の中央のもので、同じページの上の絵の右側のもの〔未詳〕。

※ Chang-su Houchins (アジア民族学専門家)により、最初の日本使節団のもものと認定される(1985年10月5日)。

※この火桶は、Frank H. NortonとFrank Leslieによる1877年本のp.252の下に掲載される版画で、下の列の右側に見えるものであるように思われる〔図7、図9〕。

E324-0

部品数	3
所蔵場所	1343C00602
資料種類	Brazier〔火鉢〕
資料名	栗蒔絵螺鈿火桶
素材	金属；木材；漆；貝
技法	蒔絵；螺鈿
文化	日本
場所	日本
収集時期	1860
受入番号・時期	60A00001 1860
寄贈者	最初の日本遣米使節 ジェームズ・ブキャナン大統領
法量	径 30.0 cm 高さ 22.0 cm



図 11 栗蒔絵螺鈿火桶  
(スミソニアン自然史博物館データベース)  
<http://n2t.net/ark:/65665/39307de39-e438-4fb6-9e3a-a61ee7c01196>  
E324-0, © Department of Anthropology,  
Smithsonian Institution

【所見】

木製漆塗の火桶で、三脚、金漆の木製円筒形、取り外し可能な銅の内炉付き。黒漆地に薄肉高蒔絵・付描・描割などの蒔絵技法、及びとても薄い真珠層で貝による螺鈿、金貝などの技法による装飾が施してある。胴部に栗の文様を表わし、口縁部には三種類の花文と七宝文を描いた方形の文様を並べ、さらに雷文で縁取る。身込上部にも渦巻き状の文様を表わす。猫脚は梨地、猪目透かしを施した持送りは黒漆地とし、それぞれ十六弁の菊花文を配する。地板は木地を活かして拭漆仕上げとする。

【機構備考】

※『最初の遣米日本使節団〔万延元年遣米使節団図録〕』（東京、1920年）（頁数が振られていない本）の冒頭から3分の2ほどの所の図版で、下側の絵の下の列の左側に、本品が描かれている〔図12〕。

※ Chang-su Houchins (アジア民族学専門家)により最初の日本使節団のもものと認定される(1985年10月5日)。

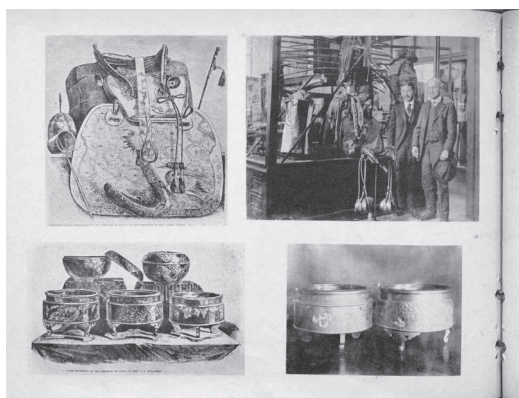


図12 『万延元年遣米使節団図録』掲載の遣米使節団贈品と見られる資料 (国立国会図書館デジタルコレクション)  
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1920856>

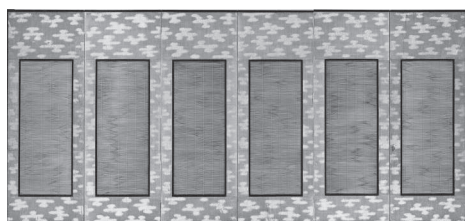


図13 翠簾屏風 (スミソニアン自然史博物館データベース)  
<http://n2t.net/ark:/65665/37be3b36b-03a4-4314-8096-90cd89a71d0f>  
 E14166-0, © Department of Anthropology, Smithsonian Institution

※この火桶は、Frank H. Norton と Frank Leslie による 1877 年本の p.252 の下に掲載される版画で、下の列の左側に見えるものであるように思われる [図7, 図9]。

E14166-0

部品数	1
所蔵場所	13111C03702
資料種類	Screen [屏風]
資料名	翠簾屏風
素材	木材；紙；金属
技法	-
文化	不明
場所	日本
収集時期	1860
受入番号・時期	60A00001 1860
寄贈者	最初の日本遣米使節 ジェイムズ・ブキャナン大統領

#### 【所見】

六曲一隻。屏風の各扇の中央部を刳り抜いて御簾をはめ  
 通気性をもたせた夏用の屏風で、「翠簾屏風」「御簾屏風」などと呼ばれる。縁は黒漆塗。全体に箔  
 散らし（砂子撒き）の雲形が散らされる。中央部の御簾は、細い竹籤を横に渡して、6カ所の編み  
 糸で繋いでいる。要所に真鍮製の銕金具（隅金具・中金具・散鉾）を打つ。

#### 【機構備考】

※もともと 1860 年に受領された 10 帖の屏風のうちの一つ。

※カードより：「1969 年 5 月。もろい構造のため、経年劣化がひどい状態で、1955 年頃、これらは  
 民間の修復所に出され、一つが保存のため修復された。(R. Elder) 残りの部分は処分された。」



図14 翠簾屏風（一部）(福岡撮影)

一つは館長室に長らく貸し出されていた。1968年に目録記入。

※確証されていないが、これらはペリー由来ではなく、1860年の最初の使節団による日本皇帝〔將軍〕からジェイムズ・ブキャナン大統領への贈り物の一部であった可能性があるように思われる。  
(R. Elder)

※1979年3月30日、Chang-su Houchinsにより、最初の日本使節団のコレクションと確定される。  
※ペリーコレクションの一部に誤って含まれる(#199043)。別のコレクション(最初の遣米日本使節団)としての登録への提案を保留中。

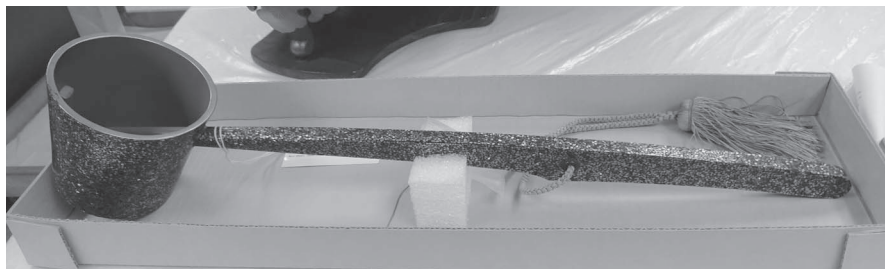


図15 馬柄杓 (E-14170-0) (福岡撮影)

**E-14170-0**

部品数	1
所蔵場所	1343C00504
資料種類	Dipper (柄杓)
資料名	馬柄杓
素材	木材；動物性繊維；漆；貝
技法	螺鈿
文化	日本
場所	日本
収集時期	1860
受入番号・時期	60A00001 1860
寄贈者	最初の日本遣米使節 ジェイムズ・ブキャナン大統領
法量	口径 10.6 cm 高さ 9.2 cm 柄長 43.0 cm



図16 馬柄杓 合の部分 (E-14170-0) (福岡撮影)

**【所見】**

木製漆塗の柄杓。円筒形の容器に、長い柄を貫通させる形式である。総体を漆塗とし、外側表面は黒漆地で全面に細かい不定形の貝片(微塵貝)を蒔き、内側表面は無地の朱塗りとする。口縁部は金蒔絵とする。柄の中程に穴を開け、菊座鳩目金具を付け、絹糸の飾り房が通してある。



【機構備考】

※ 1968年に目録記入。ペリーコレクションの一部ではない。1860年最初の日本使節団の贈呈品の一部。1987年5月28日、Pacific Heritage Museumに貸し出し。1988年10月7日、返却。

※ペリーコレクションの一部に誤って含まれる(#199043)。別のコレクション(最初の遣米日本使節団)としての登録への提案を保留中。Chang-su Houchinsを見よ。



図 17 梅鶴蒔絵書棚  
(スミソニアン自然史博物館データベース)  
<http://n2t.net/ark:/65665/3feal09c1-cd5a-470b-8aaa-72a085024fe0>  
E14188-0, © Department of Anthropology, Smithsonian Institution



図 18 梅鶴蒔絵書棚 (福岡撮影)

E14188-0

部品数	1
所蔵場所	4H06A01605
資料種類	Cabinet (書棚)
資料名	梅鶴蒔絵書棚
素材	銅 / 真鍮 / 青銅 ; 木材 ; 漆
技法	黒漆塗・蒔絵
文化	-
場所	日本
収集時期	1860
受入番号・時期	60A00001 1860
寄贈者	最初の日本遣米使節 ジェイムズ・ブキャナン大統領
寸法	高さ : 34 インチ 奥行 : 15 インチ 幅 : 36 インチ
法量	縦 37.0 cm 横 91.2 cm 高さ 84.3cm

【所見】

木製漆塗の書棚。天板、違棚を含めて5段の棚を設ける形式で、五の棚に上下3個の抽斗を設ける。天板の両端に当初は筆返しがあったものが欠失している。また、一の棚に引戸4枚、四の棚に観音開きの扉を付けていたと<sup>(78)</sup>考えられるがこれも欠失。<sup>(79)</sup>底部に刳形を施した台輪を廻らす。表面は黒漆地に淡く金粉を蒔き、金銀の薄肉高蒔絵、金貝、切金、黒漆・朱漆等による装飾で飛ぶ鶴や梅樹の意匠を表わしている。二の棚と三の棚の間に七宝花菱の透しを施し、格狭間を透かした側板や四の棚の筆返しには七宝花菱繫文を蒔絵で表わす。棚板の木口や束隅を金蒔絵とし、各所に八双金具を打つ。



【機構備考】

※幾つかの民族学コレクション記録でペリーコレクションの一部と誤って認識される。1860年の最初の日本使節団の米国大統領への贈呈品に含まれたものとして1979年に訂正される。1984年、CSH〔Chang-su Houchins〕による追加の情報源により、さらに確かめられる。参考：受け入れ時の書類は# 199,043。Cont.〔未詳〕の様々な出版された日本のリスト。カードを見よ。

※ペリーコレクションの一部に誤って含まれる（#199043）。別のコレクション（最初の遣米日本使節団）としての登録への提案を保留中。Chang-su Houchinsを見よ。

E14190-0

部品数	3
所蔵場所	2133A00202
資料種類	Saddle/Bridle/Horse Trapping/Whip/ Strirup（鞍／鐙／轡／馬装束／鞭）
資料名	鞍・鐙・轡ほか馬具一式（9品） <sup>(80)</sup>
素材	鉄；木材；皮革；絹；貝
技法	蒔絵（鞍・鐙）；螺鈿（鞭）
文化	日本
場所	日本
収集時期	1860
関係人物	ジェイムズ・ブキャナン大統領 （以前の所有者）
受入番号・時期	60A00001 1860
寄贈者	最初の日本遣米使節 ジェイムズ・ブキャナン大統領
法量	（鞍）前輪高さ （鐙）横 24.0 cm 幅 13.2 cm （障泥）横 70.2 cm （三尺革）長さ 79.0 cm 幅 8.0 cm



図 19 馬具類 (E14190-0) (福岡撮影)



図 20 馬具類 拡大写真（鞍、切付、力革等）（福岡撮影）

【所見】

鞍は木製で、総体を梨地に仕立て、前輪と後輪の表面は、金と青金（金と銀の合金）による薄肉高蒔絵の牡丹唐草文を施して地文とし、さらに金・銀・青金等による錆上高蒔絵等で絵替わり意匠の扇面を散らしている（史料には地紙散とあり。後掲【史料16】参照）。扇面の意匠は、雲龍・獅子牡丹・諫鼓鶏・登龍門・梅に鶯など。鐙は鉄製漆塗で梨地仕立て、装飾は鞍と同様である。鞍に付いている障泥（あおり）は革製、下地が白で、型押し、箔押し、彩色など



図 21 馬具類 鞍 側面拡大写真  
(福岡撮影)



図 22 馬具類 鞭 (福岡撮影)  
※上はフェルト製ブランケット  
〔【機構備考】参照〕



図 23 馬具類 三尺革など (福岡撮影)

により、金色の蜀江花菱文を地紋として、三羽の大きな鶴を表す。菊座鳩目金具は鍍銀製。鞆（したぐら・下鞍）一対（切付・膚付）、馬氈、力革一対、三尺革は、白地に同様の技法を用いて金・赤・緑の牡丹文を表している。三懸（さんがい・鞍骨装束としての懸け緒、いわゆる鞆）は紅絹糸の厚総とする。鞭は木製黒漆塗で、不定形の貝片（微塵貝）を撒いた螺鈿の筋を装飾とし、先端には銅製鍍銀の金具を嵌め、柄には革を貼り、手元近くに空けた穴に革紐を通す。E-14170-0の馬柄杓も本来はこれらと一具で贈られたものと考えられる。

#### 【機構備考】

※ 1963年5月17日：織物の箱に一対のブランケットがある。134センチ四方で、大部分は赤のフェルト製だが、青・白・黄色の縞模様があり、そのうち二者に別の色で花模様が付けられている。日本のもののようには思われない。<sup>(81)</sup>R. Elder。

※ 参考：日本語の本『最初の日本遣米使節団〔万延元年遣米使節図録〕』（東京、1920）：本の冒頭から3分の2ほどのところに、これ〔この馬具一式〕が上部の二つの図版に掲載されている〔図12〕。一つは写真で、一つはスケッチであり、前者は右側に Walter Hough 博士が、日本人の役人〔『万延元年遣米使節図録』編者の田中一貞〕とともに写っている。彼らは展示ケースの前に立っている。

※ 日本のサムライ暫定展示、1971年4～7月

※ カードより：1860年に日本のタイクーンにより米国大統領ジェイムズ・ブキャナンに贈られた。

※ 記録で、これが1860年の最初の日本遣米使節団のメンバーを通じて日本の「タイクーン Tycoon」からジェイムズ・ブキャナン大統領に贈呈されたとされている。目録カードはこれにつき日本の天皇を意味すると解釈している。しかし日本の江戸時代では、「タイクン Taikun」という言葉は、外国との関係における日本の将軍を示す外交上の肩書きとして用いられた。将軍は日本の天皇より重要であることを示す試みとして。この言葉の修正形が英語の「タイクーン tycoon」である。

※ この鞍は、Frank H. Norton と Frank Leslie による1877年本の p.252 の上に掲載される版画に見えるものであるように思われる〔図9〕。

E14191-0

部品数 3  
所蔵場所 1322C01101  
Index term 鞍／鐙  
資料名 桐鳳凰蒔絵鞍・鐙  
素材 鉄；木；動物性繊維；漆  
技法 蒔絵  
文化 日本  
場所 日本  
収集時期 1860  
受入#時期 60A00001 1860  
寄贈者 最初の日本遣米使節  
ジェイムズ・ブキャナン大統領  
法量 (鞍) 前輪高さ 28.0 cm  
(鐙) 総高 25.0 cm 横 24.0 cm

【所見】

鞍は木製漆塗で総体を梨地に仕立て、金・青金の高蒔絵に付描、金貝、切金、朱漆や黒漆を交えて、桐と鳳凰の図柄を表す。鳳凰は中国の伝説上の鳥で、桐の木に宿り、聖君の即位とともに瑞兆として現れるといわれる。為政者を象徴する吉祥の意匠として表された。鐙は足先を包む壺鐙が発展して定着した舌のある形式(舌長鐙)で、紋板に母衣穴を設け、透かしは梅鉢文。鉄製漆塗、表面の装飾は鞍と同様である。



図 24 桐鳳凰蒔絵鞍 (E14191-0)  
(福岡撮影)

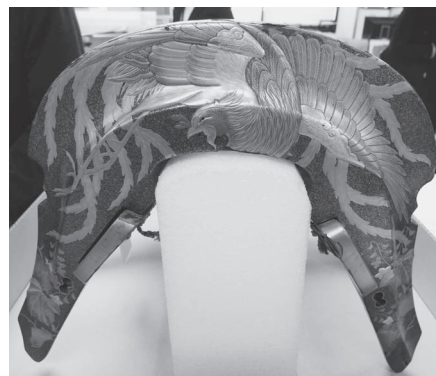


図 25 桐鳳凰蒔絵鞍(側面)  
(福岡撮影)



図 26 桐鳳凰蒔絵鐙 (福岡撮影)



図 27 桐鳳凰蒔絵鐙 拡大写真 (福岡撮影)



## 【機構備考】

カードより：〔日本の〕タイクーンからルイス・カス氏に贈られたもの。記録で、これが1860年の最初の日本遣米使節団のメンバーを通じて日本の「タイクーン Tycoon」から、ジェイムズ・ブキャナン大統領の下の国務長官ルイス・カスに贈呈されたとされている。目録カードはこれにつき日本の天皇を意味すると解釈している。しかし日本の江戸時代では、「タイクン Taikun」という言葉は、外国との関係における日本の将軍を示す外交上の肩書きとして用いられた。将軍は日本の天皇より重要であることを示す試みとして。この言葉の修正形が英語での「タイクーン tycoon」である。

## 3-3 贈品の準備過程

遣米使節団は、安政七（万延元）年一月十八日（1860年2月9日）に品川沖で米艦ポーハタン号に乗船し、二十二日に、サンフランシスコに向けて横浜を出航した。これに先立ち、米国大統領宛て贈答品のリストが固まったのは安政六年十一月二十六日（1859年12月19日）のことで、うち幕府の御細工所において各担当者に準備・制作方が指示されたのは翌二十七日であった。後述するように、一連の贈品は、腰物方・納戸方・細工方の分掌により準備・制作がなされることとなったが、中でも細工方は、馬具一式・掛物・翠簾屏風・書棚・料紙硯箱という大部分の贈品の準備を受け持った。下命があってから使節団の出発まではひと月半ほどしかなく、急ピッチで準備が進められることとなる。以下、関係史料に基づき、その経緯をまとめる。

## 3-3-1 贈品の内訳が決まるまで

遣米使節団の正使・副使に最終的に任命されることになった新見豊前守正興・村垣淡路守範正・小栗豊後守忠順は、安政六年九月二十七日（1859年10月22日）、米国へ派遣されるに当たっての心得方全般に関する上申書を老中に提出した。その中で、大統領への贈呈品については、次のような原案が出された。<sup>(82)</sup>

## 【史料9】

- |               |     |
|---------------|-----|
| 一、拵付太刀        | 二振  |
| 一、馬具          | 一揃  |
| 一、掛物 極彩色 墨画山水 | 十幅程 |
| 一、錦戸帳         | 五垂  |
| 一、翠簾屏風        | 五双  |
| 一、楽器          | 一揃  |
| 一、大工道具 大中小    | 三通  |

将軍から米国大統領へ贈られるべきこれらの贈品の立案の際には、「先年彼国より之献貢物」が踏まえられた。これは、1857年12月に米国総領事タウンゼント・ハリスが江戸城で将軍徳川家定に謁見した際、米国大統領フランクリン・ピアースの親書とともに将軍に献上された品々のことを指すと見られる。それらは、シャバイ（シャンパン）大瓶12本、小瓶24本、チェルリー（チェリー酒）12瓶、銘酒類12瓶、燈台、キャマン雪洞（燈台付属品）3点、硝子筒6点、燈心36点、望遠鏡1点、晴雨計1点、キャマン銘酒瓶1点、錠鍵5点、鳥獣絵2冊、以上10箱13品であった。<sup>(83)</sup>

しかしこの後、遣米使節の方針全般に関する幕閣内の評議は深まらないまま、十月十七日（11

月11日)、江戸城が大火災に見舞われる。火事は、本丸御作事下部屋から出火し、本丸御殿、御書院櫓、台所前三重櫓、汐見二重櫓、汐見太鼓櫓などを焼き尽くし、幕政は大混乱に陥った。この際、当時、江戸城内で準備制作が進められていた英国政府への一連の贈呈品も焼失している。これは、安政六年一月(1859年2月)に英艦インフレキシブル号が江戸に来航して日英修好通商条約の批准書が交換された折に英国女王から蒸気船エンペラー号が贈呈された返礼として、その後、江戸城内で英国女王宛てに準備されていた贈品であった<sup>(85)</sup>。政務資料も大部分が消失したようで、上記の上申書はその後、十月二十一日(11月15日)に改めて老中に提出された。

遣米使節の実施方針に関する評議は、この前後からようやく動き出したようで、十月から十一月にかけて、勘定奉行、外国奉行、大小目付ら、そして評定所一座の評議書が、それぞれ出されている。その中で、贈品候補の一角を成す楽器については、相次いで懸念が表明された。例えば勘定方の評議では、「楽器ハ何様優美之品ニ付、礼儀を重し候国柄に候得ば、至極宜敷可有之候得共、旧を陋め新を貴ひ候夷俗ニては、隋唐之雅楽を今日に伝候とて、左迄感心も仕間敷、殊に楽器等持渡、万一聴聞之儀申出候節、合奏までニハ無之候とも、一行人数之内、音律相応に相心得候者三五人も無之候ハ、自然不都合之儀可仕も難計」と指摘された。礼儀を重んじる国柄ならまだしも、古きを軽んじ新しきを貴ぶ「夷俗」に対して、古代の礼楽を象徴する楽器を贈ったとしてもさして感心はされず、かつ万一、楽器の演奏を所望された場合に演奏できる者が使節団中にいなければ困ることになる、というわけである。評定所一座も、楽器については「古来よりの神器ニて至重之品々も有之候間、外国へ御差渡如何ニ付」とし、リストから除くことを提案した<sup>(87)</sup>。

こうした評議を踏まえ、十一月二十一日の老中達書において、遣米使節派遣の心得全般に関する方針が打ち出された<sup>(88)</sup>。その中で大統領宛て贈品については、楽器は止めて代わりに漆器類とし、大工道具は止めて代わりに大和錦として、員数は「其方共見込」をもって取り調べの上申告すべきこと、その他の品々については原案通りとし、仕立て方について検討して申告すべきことが指示された。

この指示を受け、正使・副使の新見・村垣・小栗から、大統領宛て贈品の修正リストが、各品々のより詳しい仕様や準備すべき点数を添えて、上申されたのが十一月二十六日である。その内訳は以下の通りであった<sup>(89)</sup>。

#### 【史料10】

##### 一、拵付太刀 一振

右は、是迄外国人え被下候通り之御仕立相成可然、

##### 一、馬具 一揃

是は、蒔絵鞍籠、紅厚房鞞<sup>しりがい</sup>、磨轡、切付、泥障、力革等、金にて唐草模様杯有之美麗之方可然、

##### 一、掛物 十幅

是は、内五幅極彩色、五幅墨絵山水、御絵様は、御絵師にて取調相伺候様被仰渡、仕立方之儀は、絵表具・真草表具等取交へ、是又美麗之方可然、

##### 一、錦戸帳 五垂

是は、青黄赤白紫等之色目にて、飾房等も、班或は打交等にて、色目取合候方可然、

##### 一、翠簾屏風 五双

是は、是迄被下候御振合ニ御仕立相成可然、



楽器相止代り品

一、漆器類

是は、蒔絵書棚、梨子地蒔絵料紙硯箱、

大工道具相止代り品

一、大和錦

是は、十巻も被下候方、

なおこれに先立ち幕府は、安政二（1855）年、オランダ国王から蒸気船スピン号が贈呈された返礼として、老中の名において、オランダ国王（ウィレム三世）宛てに一連の贈答品を贈っており、その中には、長刀（柄蒔絵金物付）二振や翠簾屏風十双が含まれていた。また安政六（1859）年初頭、遣米使節の派遣に先立つ時期には、日英修好通商条約の批准書交換時に送られた贈品の返礼として、英国女王宛てに一連の贈答品が準備され、その中にも太刀二振や翠簾屏風十双があった<sup>(90)</sup>。今回のリストにおいて、「是まで下され候御振合」などと参照されているのは、さしあたってはこういった先例であったろう。

この上申書が老中に上った翌十一月二十七日には、それぞれの贈答品の準備が江戸城内の関係する職掌に割り振られた。すなわち太刀は腰物方、馬具・掛物・錦戸帳（但し「地の外」）・翠簾屏風・漆器類は細工方、大和錦は納戸方に、準備方が割り振られている<sup>(91)</sup>。これを受け、細工所では、馬具一揃い及び漆器類は「仕置物」を買い上げ、それに必要であれば適宜装飾を追加的に施すことで仕立てる一方、掛物及び翠簾屏風については細工所の責任で制作して仕立てる方針が定められたようである。馬具類・漆器類は小道具并小買物師・馬具師・鞍塗師の面々に、掛物・翠簾屏風は表具経師並屏風師や塗師方・木地方・飾方・地方・糸方・翠簾師の面々、及び御用絵師との連絡役とみられる人物（長谷川美濃）に、細工頭から分担準備がそれぞれ割り振られ、「念入仕上可申候」と申し渡された。この上で、細工頭から若年寄酒井右京亮忠毗には、職掌の者に「急速出来方之儀」を指示したことが報告されている<sup>(92)</sup>。

なお、やはり当初、細工所に準備が割り振られた「錦戸帳」は、制作に手数がかかり迅速に仕上げるのが難しいことが、照会の結果判明した。その結果、錦戸帳はやめて「幔幕」に品替えをし、その調達を納戸方へ指示することが決められ、十二月九日までに、「緞子堅幕」二張の制作が納戸頭に指示されている<sup>(93)</sup>。

「錦戸帳」は「普通之戸帳を錦にて仕立候もの」<sup>(94)</sup>で、戸帳は斗帳や御帳台、あるいはただ帳（御帳）とも呼ばれ、天皇・皇后をはじめ、貴人の御座所に据えられる坐臥具であった<sup>(95)</sup>。当初の大統領贈品の内訳が決まった後、外国方は「戸帳之仕立方寸法等」について問合書（おそらく細工方宛て）を出しており、それに対する回答書は、下のような図解を掲げ、「方八尺六寸、高さ八尺之板」<sup>(96)</sup>、「土居」<sup>つちい</sup>、畳二畳、柱などから成るその構造と、四隅に掛ける四幅の帳、「四方の中」に掛ける五幅の帳、上に掛ける「帽額」<sup>もこう</sup>など、骨組みを覆うべき錦の帷、柱に掛ける掛鏡や犀角などについて説明している。全体の寸法は、天皇・皇后の御帳は「方一丈又九尺之定」、それ以外は「方八尺以内」とし、総じて帳台は、「御所の外、中古絶て」、ことに武家では名目ばかり残って実際に使われていないものの、古くは「高貴之者」に限らず武家でも使用されていたと見られることが、平治物語や義経記の事例から説明されている<sup>(96)</sup>。その説明と図解は、平安貴族の儀式の際の饗膳・室礼・装束を図解説明した『類

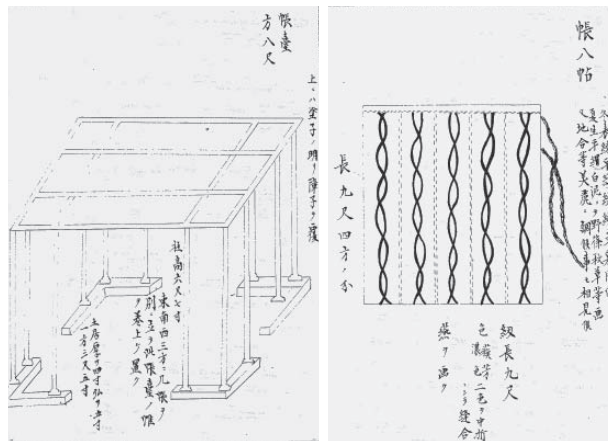


図28 錦戸帳の図解

JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.B13090278200. 条約／新見豊前守等米国渡航本条約書交換一件 十六 (続通信全覧類輯之部修好門 153) (外務省外交史料館)

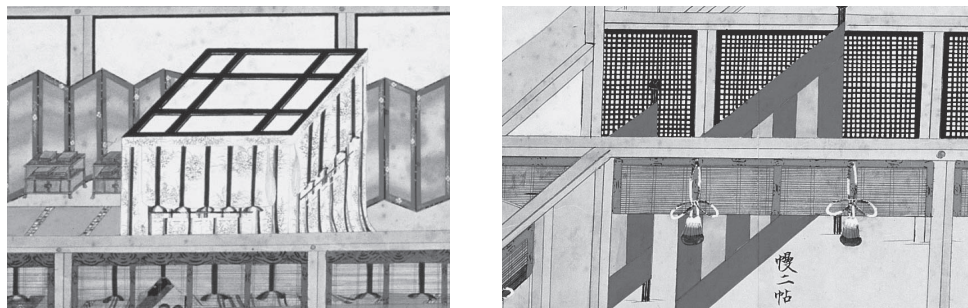


図29・30 御帳(戸帳)・幔幕  
(国立歴史民俗博物館蔵 H-528 『類聚雑要抄指図巻』)

『類聚雑要抄』及び『類聚雑要抄指図巻』<sup>(97)</sup>に見られる御帳台の説明と極めて類似しており、細工方でも、その写本を参照しながら外国方の問合せに答えたのかもしれない。

結局、準備時間が足りず幔幕に品替えされたものの、少なくとも当初は、朝廷の最上層の貴人が使う伝統的調度が、大統領宛ての増進品の一つとして想定されたことは、興味深い事実である。なお御帳(戸帳)とその代理品となった幔幕について、『類聚雑要抄指図巻』(国立歴史民俗博物館蔵)に見える図解(図29・30)を、参考のため掲げておく。

## 3-1-2 細工方における掛物・翠簾屏風の制作

細工方の責任で制作されることとなった贈品二種のうち、掛物については、幕府の御用絵師（奥絵師）である狩野薫川・勝川から十一月二十九日までに、絵様の案が出された。極彩色の掛物五幅には「群青地牡丹」、「櫻に鷹」、「群青隈月ニ葛」、「富士三保」、「菊小鳥」の絵様が、「墨絵山水」の掛物五幅には「竹」、「葡萄」、「梅」、「松」、「鶴」の絵様が提案されている。<sup>(98)</sup> これを受け、十二月二日には、若年寄酒井忠毗から狩野薫川・勝川に対し、狩野派と住吉派の奥絵師五家がそれぞれ、極彩色と墨絵の掛物1点ずつの掛絵を描くよう指示がなされた（「富士三保」「梅」は狩野薫川、「群青地牡丹」「竹」は狩野勝川、「櫻に鷹」「葡萄」は狩野栄眞、「群青隈月ニ葛」「鶴」は狩野探原、「菊に小鳥」「松」は住吉内記に対し、それぞれ割り振られている。<sup>(99)</sup>）。十二月七日には、それぞれの御用絵師から、分掌する二幅ずつの掛絵について伺下絵が提出され、老中へと上った。<sup>(100)</sup> この後、各奥絵師による掛絵は、十二月十九日までには全て完成し、細工方に届けられたようである。なお住吉内記担当分の掛絵の仕上がりは他の絵師より遅かったらしく、十二月十七日、催促の書状が細工頭から住吉内記に送られている。<sup>(101)</sup>

この後、細工方では、それぞれの掛絵に装飾的な表装を施して、十幅の掛物に仕上げた。その際の表具については、金襴地の表具の詳細な仕様書が、「亜行御用留」増進品之部に以下のように残っており、参考のため掲げておく。

【史料 11】<sup>(102)</sup>

巳未十二月二日

## 一 御掛物表具地金襴

但何れも弐幅取

壺組は 上下紫地建仁寺牡丹

中紺地七宝ニ桐

一文字茶地角門ニ花

壺組は 上下紺地牡丹

中媒竹地山榊宝

一文字萌黄地小牡丹

壺組は 上下紺地堅杵ニ花の丸

中萌黄地金花鳥

一文字白地小宝

壺組は 上下青茶地牡丹

中媒竹地唐花

一文字白地雨籠

壺組は 上下紺地太鼓籠

中媒竹地牡丹

一文字白地小宝

壺組は 上下紺地菱組ニ牡丹

中茶地宝尽し

一文字白地小牡丹  
 壳組は 上下青茶地太鼓龍  
 中茶地牡丹  
 一文字紺地宝尽し  
 右之通り  
 十二月

御細工所

掛物の軸にも装飾が凝らされたようで、「黒塗蒔絵御掛物軸」の紋様として、「宝尽」<sup>(103)</sup>、「房桜」<sup>(104)</sup>、「松唐草」<sup>(104)</sup>、「千鳥」の絵形（図31）が作られ、外国方に提案された。これに対し外国方は、さらに「紅葉」などの紋様を加えるように等の指示を細工方へ出している。

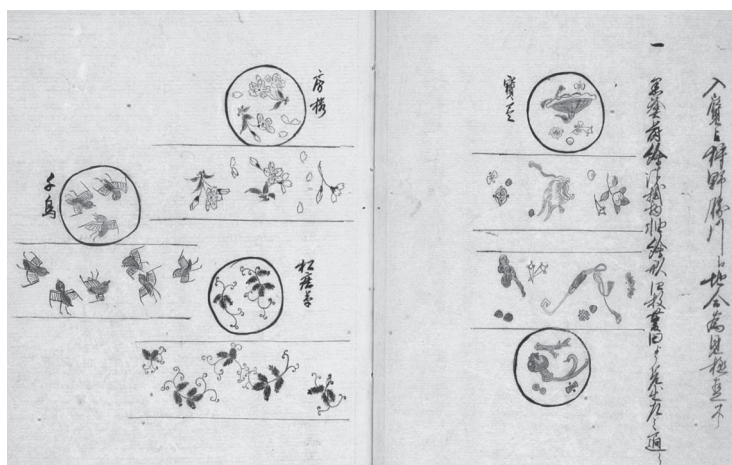


図31 掛物軸の絵形案（「宝尽」<sup>(103)</sup>、「房桜」<sup>(104)</sup>、「松唐草」<sup>(104)</sup>、「千鳥」）  
 （東京大学史料編纂所蔵 「亜行御用留」増進品之部）

この後、年明け頃には、以下の通り、仕上がった掛物が江戸城内の時圭之間において若年寄酒井忠毗の見分に供され、出来栄えについて報奨に預かった。<sup>(105)</sup>

【史料12】

- 一 御掛物、軸類蒔絵、出来栄差出、助次郎・半六致見分、直ニ時計之間ニおひて右京亮殿入御見分ニ、至極出来栄宜敷旨御沙汰有之、後刻、長谷川美濃守え相渡ス

一方、翠簾屏風は、十一月二十七日の細工方の指示書において、表具経師并屏風師や翠簾師及び塗師方・木地方・飾方・地方・糸方・翠簾師などの各専門の職人計20名に制作方が命じられた。<sup>(106)</sup> これを受けて二十九日には早速、屏風五双分の表具の装飾に使う金箔（三寸八分の焦箔13,272枚、三寸八分の色箔8,848枚）が発注されている。<sup>(107)</sup> これらは催促の上、勘定方から細工方に対して十二月四日までに届けられ、<sup>(108)</sup> 屏風中央の御簾廻りの表具の両面を砂子蒔きの雲形で装飾するのに使われた。また屏風を構成する一扇一扇の正寸の紙形や、試みに装飾を施した「雲箔砂子紙」の見本、屏風の外枠用とみられる「縁金物」の絵形なども、細工所で準備され外国方に送られ、外国方では

見本通りで異存がない旨が、十二月四日までに細工方へ伝えられた。<sup>(109)</sup>次いで十二月八日には、翠簾屏風の縁地に使う金襴の組合書が、細工所により以下の通り作成され、外国奉行へ伺いのため送られた。これも外国方では異存ない旨、下札を付けて細工方へ返されている。<sup>(110)</sup>

【史料 13】

御翠簾屏風縁地組合

一、御翠簾屏風縁地金蘭

大縁	白茶若松鶴
小縁	紺地小牡丹唐草
但弐双取	
大縁	紺地中牡丹唐草
小縁	白茶小牡丹模様
但三双取	
大縁	白茶桐唐草
小縁	紺地小牡丹模様
但弐双取	
大縁	浅黄桐唐草
小縁	茶小牡丹模様
但弐双取	
大縁	紺地桐唐草
小縁	白茶小牡丹
但弐双取	
大縁	紺地唐宝模様
小縁	萌黄小牡丹模様
但三双取	
大縁	紺二重鶴牡丹
小縁	白茶小牡丹模様
但弐双取	

3-1-3 細工方における御買上品の準備過程

馬具類、書棚、料紙硯箱など、細工方で「仕置物」を買い上げて準備することとなった品々については、そのうちのまず書棚について、十二月十九日までに、候補品の絵形・寸法書が用意され、外国方へ閲覧に供された。これら最初の候補となった書棚には、よく似た形のもので二種類あったようである。一つは「蠟色梅二鶴蒔絵」の書棚である。一寸 = 303.65 mm の享保尺を基準として尺寸表記から換算すれば、長さ（横）91.095 cm、幅（縦）36.438 cm、高さ 85.022 cm で、パーツ毎に「梅立木蒔絵」か「三羽鶴蒔絵」の蒔絵装飾が施されているものである（図 32）（「垂行御用留」贈品 fol.67-68）。もう一つは「惣体黒塗梅二鶴蒔絵」の書棚で、上記のものより一回り小さく、やはり享保尺基準で換算すれば、長さ（横）75.9125 cm、幅（縦）34.91975 cm、高さ 80.46725 cm



の寸法であった(図33)(贈品 fol.68)。

(図32)

蠟色梅二鶴蒔絵

一 書棚 長三尺

幅一尺二寸

高二尺八寸

但銀かな物鼻先絵様蜀毛彫

※帳紙は、上から順に、「甲梅立木蒔絵」,「此所梅立蒔絵」,「此所梅立木蒔絵」,「此所三羽鶴蒔絵」,「此所三羽鶴蒔絵」,「外廻り惣体梅立木蒔絵」,「此所三羽鶴蒔絵」,「此所梅立木蒔絵」,とある。

(図33)

但惣体黒塗梅二鶴蒔絵金物銀減金

大キサ

長式尺五寸

横壹尺壹寸五分

高式尺六分五寸

これらの絵形を、現在スミソニアン研究機構に遣米使節の贈品として残っている書棚(図34)と比べると、寸法上、若干の誤差があり(調査時の計測結果は横91.2cm,縦37.0cm,高さ84.3cm),また形状の点でも若干の相違(下記)があるものの、図32の絵形と極めて類似する。実際、後述の【史料16】に見えるように、最終的に選ばれた書棚は「蠟色梅二鶴蒔絵」のものとなった。形状では、絵形には上部に抽斗や下部右側に扉があるが、実際の書棚にはこれらがない。ただし日高によれば、抽斗や扉は後に外された可能性もある。今後、実際の資料の再調査を行う機会があれば、これらの形跡があるかどうかや、抽斗や扉が別置されているかどうかについて、追加調査を要しよう。これらの点を踏まえた上で、现阶段の判断では、図32の絵形の書棚が実際の贈品として選ばれた可能性は、極めて高いとおきたい。

十二月二十日には、江戸城内大広間脇に仕立て

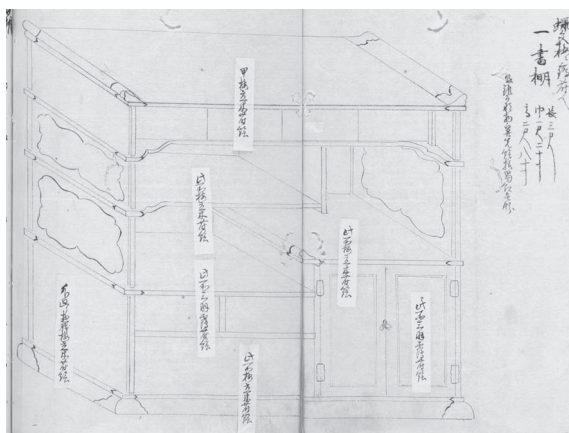


図32 「蠟色梅二鶴蒔絵」書棚 絵形  
(東京大学史料編纂所蔵  
「亜行御用留」増進品之部)

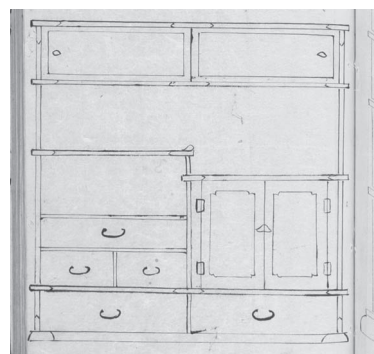


図33 「惣体黒塗梅二鶴蒔絵」書棚 絵形(同前)



図34 スミソニアン研究機構所蔵の梅鶴蒔絵書棚  
(E14188-0)(福岡撮影)

られた「御仮建内」において、細工方が取り揃えた馬具類の候補が、以下の通り並べられ、外国奉行による見分が行われた。<sup>(112)</sup>

【史料 14】

(朱書)

い印

一 扇散花鳥蒔へ鞍鐙 壺通

(朱書)

に印

一 かんこ蒔へ同断 壺通

(朱書)

ろ印

一 牡丹泥障 壺刺

(朱書)

か印

一 牡丹切附 壺口

見分した村垣淡路守範正ら外国奉行は、「右四口、先留置、猶又鞍鐙ハ蒔絵宜敷方鑿穿致し、泥障切附ハ染皮ニテ美麗之品、又ハ毛類等取交出し候様」と、これら四品は当面留め置きつつ、鞍鐙・泥障・切附について追加の候補品を出すように指示している。外国方からはこの後細工方にさらに、「重て馬具類出し候節、書棚料紙も一緒ニ出し候様」、つまり次回、追加候補を取り揃えて改めて馬具類を出す際は、書棚・料紙硯箱の候補も一緒に出すようにと指示が伝えられた。

これを受けて十二月二十二日には、馬具類・書棚・料紙硯箱の新たな候補品が取り揃えられ、それらの品書きが以下の通り、細工方から外国奉行に一覧に供された。<sup>(113)</sup>うち「い」～「と」の六品が鞍鐙の候補、「ち」～「る」は馬具類の付属品（泥障・切附・力革・四方手）の候補一点ずつ、「を」が書棚一点、「わ」～「た」が料紙硯箱の候補四点となっている。

【史料 15】

梨子地蓬萊蒔絵

(朱書)

い

一 鞍鐙 壺通

同浪ニ二羽鷹蒔絵

(朱書)

ろ

一 同断 壺通

同地紙ちらし花鳥蒔へ

(朱書)

は

一 同断 壺通

同岩ニ錦鶏蒔絵

(朱書)

に

一 同断 壺通

同獅子蒔絵

(朱書)

ほ

一 同断 壺通

- 同かんこ蒔絵  
<sup>(朱書)</sup>と 一 同断 壺通
- <sup>(朱書)</sup>ち 一 泥障  
但、置出し形、裏鞆皮黒塗、縁座金箔置、鶯目銀減金打、根紐同皮ニいたし
- <sup>(朱書)</sup>ろ 一 切附 壺口  
但、置出し形、中真毛氈入仕込品用ひ、竈一文字、縁鞆皮、野杏下地銅黒塗、逆輪銀焼付ケ、仕掛革とも、
- <sup>(朱書)</sup>ぬ 一 力革 壺通  
但、刀革長四尺板、馬糞付、縁金ニ致し
- <sup>(朱書)</sup>る 一 鏡四方手 壺口  
但、銀減金、紫皮引緒、雉子股とも付ケ、
- 蠟色梅ニ霽蒔へ  
<sup>(朱書)</sup>を 一 書棚 壺
- 梨子地松竹梅蒔へ  
<sup>(朱書)</sup>わ 一 料紙硯 壺通
- 同菊蒔へ  
<sup>(朱書)</sup>か 一 同断 壺通 <sup>(朱書)</sup>此分品不宜候二付相除候様、外国奉行申聞候
- 同花車蒔絵  
<sup>(朱書)</sup>よ 一 同断 壺通
- 同花乃丸蒔絵  
<sup>(朱書)</sup>た 一 同断

右之通

未十二月

右品書之通り、并過日留置候品々共、外国方塚原重五郎え引合之上、大広間え松太郎・織右衛門・七之助、職々召連、品々相廻し候処、外国奉行一同一覽、品書之内、菊蒔絵料紙相除き、書棚ハ今一応吟味致し、式ツ三ツ差出候様、若外ニ書棚全く見当不申候ハ、右ニ代り候筆筒にて

も宜旨、村垣淡路守より談、小買物え申付候、

- 一 右品々御老若方え入御見分ニ候義は、外国奉行神奈川表え御用にて罷越候ニ付、廿六七日頃には帰宅致し候積り、帰り次第案内致し候間、其節御見分差出呉候様、且過日相回り候品書之内、花鳥模様切附肌付共、猶又差出候様、外留置候品は不用、鞭は青貝筋鞭にて銀減金に出来候様、馬柄杓は下地にて差出候方にて宜敷旨、村垣淡路守より松太郎織右衛門七之助承り来ル、尤所々出来之義は、来正月十四日頃迄にて差支無之旨、全同人被申聞候、

このように新たに取り揃えられた候補品は、先日取り置いてあった候補品ともども、江戸城内の大広間において、改めて外国奉行らに一覧に供された。その結果、四つ候補が出された料紙硯箱のうち、「菊蒔絵」のものは候補から外されることとなった。また書棚は「蠟色梅ニ鶴蒔絵」のもの一点しか候補が出されなかったが、さらに二、三点候補を出すように、もし見つからなければ代わりに筆筒でもよい旨が、外国奉行村垣から細工方の小買物師に指示されている。

さらにこれらの品々を、老中・若年寄ら幕閣の面々（「御老若方」）に御見分に入れる日取りが、外国奉行が今後十二月二十六・二十七日頃に神奈川出張から帰った後、早々に取り決められることとなった。かつ先日出された候補品中、花鳥模様の切附・肌付（【史料 14】のろ印「牡丹泥障」か印「牡丹切付肌付」か）はその際の御見分に改めて出し、その他取り置き品（い印「扇散花鳥蒔絵鞍籠」、に印「かんこ蒔絵鞍籠」か）は出さなくてもよいこと、さらに青貝筋で銀減金を施した鞭と馬柄杓（未装飾のものでよい）を併せて御見分に出すよう、村垣から細工頭に指示がなされている。なお村垣は自身、嘉永年間に細工頭を務めた経験があり<sup>(114)</sup>、それもあってか、今回の贈品準備に際しては外国方をリードして、詳細の指示に当たったことがうかがえる。

この後、予定された御老若方の見分は、十二月二十七日に行われることとなった。場所は当初、大広間で予定されたものの、支障があり、柳之間に変更された。それに先立ち、展示した候補品を外国奉行が一覧し、その際、四方手は鏡四方手に、轡は鏡轡にするよう、村垣から細工頭に内談があった。

【史料 16】（「亜行御用留」贈品 fol.84-85）

- 一 外国方え織右衛門相廻り、昨日於大広間御見分儀、御達申候処、今日ニ至り大広間差支之趣ニ付、柳之間え品々差出し候段、成瀬善四郎へ織右衛門引合、品書渡ス
- 一 柳之間え飾附候品々御見分前、外国奉行一覽致ス、其節此四方手ハ鏡四方手、轡ハ鏡轡ニ致度趣、村垣淡路守より助次郎え内談有之
- 一 御老若方品々御見分被成、鞍籠、三脊、泥障、切附、力革等ニ、可相成、染革類、青貝鞭、馬柄杓、書棚、料紙硯箱、御見極メ被成、直ニ時圭之間え相廻し候様、助次郎え被仰渡、直ニ相廻ス、猶又、於御部屋御見分被成、左ノ通りニ御極りニ相成、尤泥障切附等ハ、靱皮ニ美麗成模様有之方、並毛類等、又ハ仕立切放も取交、紅厚房ニ出合候品、明後朝出し候様、立田縁助ヲ以、助次郎へ被仰渡候ニ付、御役所にて三郎より助次郎・関・名太屋・



---

鍵屋え申渡ス

梨子地地紙散花鳥蒔絵

は印 一 鞍鐙 壺通

に印 一 青貝筋鞭 壺本

た印 一 馬柄杓 壺本

蠟色梅ニ鶴蒔絵

れ印 一 書棚

梨子地松竹梅蒔絵

つ印 一 料紙硯 壺通

右御品、鐙鞍ハ掛立しはりいたし、馬柄杓ハぬり差掛り候様、鞭ハ御見本之通りかな貝銀にて新規出来候様、書棚かな物放れ候処付堅メ、料紙硯共掛立候様、関・名太屋・鍵屋え申付、下ケ遣

一連の贈品候補の御老若方による御見分は、まず柳之間で、次いで時圭之間でも行われた。その結果、鞍鐙、書棚、料紙硯箱について決定がなされ、それぞれ「梨子地地紙散花鳥蒔絵」、「蠟色梅ニ鶴蒔絵」、「梨子地松竹梅蒔絵」のものが選ばれたことが分かる。一方、泥障や切附については、さらに候補を拡充し、明後日の朝に改めて提示するよう指示がなされた。

それを受け、十二月二九日に改めて泥障・切附の候補品の見分が、柳之間において行われた。泥障は四点、切附は二点の候補品が出され、その結果、「鶴花菱」模様の泥障、「牡丹」模様の切附肌付が選ばれることとなった。

【史料17】（「亜行御用留」贈品 fol.86-87）

十二月廿九日 助次郎

（朱書）  
極ル

一 鶴花菱泥障 壺刺

但鶴目銀減金菊座付

一 青海波龍泥障 壺刺

但前同断

一 龍泥障 壺刺

但前同断

- 一 牡丹泥障 壺刺  
但前同断
- 一 龍色入切附肌付 壺口 下札 力革板馬■用模様ニ出来  
但野沓逆輪銀減金ニ付、純模様金箔置
- <sup>(朱書)</sup>  
極ル 一 牡丹切附肌付 壺口  
但野沓前同断

右品々於柳之間御新調御道具御見分之御席ニ見分ニ出ス、尤外国奉行え助次郎引合致ス、後刻、御老若方被成御見分、右之通り御極ニ成ル

この後、鏡四方手と鏡轡については、見本や絵形でもって、細工所と外国方の間で仕様の確認が行われ（十二月晦日）、青貝筋鞭についても「筋之分、銅物銀減金にて出来」るよう、双方の間で仕上げ方の確認がなされている（未十二月）。さらにこの他の馬具類で、三尺革についてもこの頃に、絵形が細工方で作られて外国方に廻され、了承を受けた〔図35〕。

書棚・料紙硯箱については、やはり十二月末までに、内箱は「上桐」、外箱は「楸」で仕立てて何れも白木作りとし、浅黄色の加賀絹で掛覆をし、「和ら」（緩衝材）を詰め、料紙硯箱には服紗も入れるといった細部の仕様の伺いが細工方から立てられ、外国方<sup>(116)</sup>がその旨了承している。

#### 3-1-4 贈品一式の最終準備と上覧、使節団の出発

年明けになると、出揃ってきた馬具類や書棚、料紙硯箱、さらに仕上がってきた掛物や翠簾屏風、またこの間に腰物方で準備されていた太刀、これら一連の贈品をそれぞれ入れる内箱・外箱をめぐって、箱の仕様や梱包の仕方、銘書の書き方などに関するやり取りが、細工方と外国方<sup>(116)</sup>の間で頻繁に行われている。

その後正月十二日には、こうして取り揃えられた一連の贈品が、御老若方による最終見分を経て、上覧に供されることとなった。場所は当初、柳之間で予定されたところ、明かりが十分でないということで、急きょ帝鑑之間で行われることになった模様である。一覧に供された品物の目録を【史料18】に、幕閣の見分及び將軍による上覧の経過を、【史料19】<sup>(117)</sup>に引く。

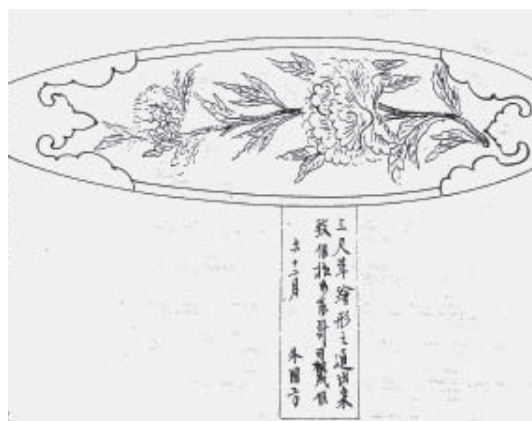


図 35 三尺革の絵形

JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B13090277800, 条約/新見豊前守等米国渡航本条約書交換一件 十五 (統通信全覽類輯之部修好門 152) (外務省外交史料館)

【史料 18】

御見分之儀奉伺候書付

馬具一揃

一 鞍鐙	壺通
一 切附	壺口
但板馬靱刀革共	
一 鏡四方手	壺口
但総角共	
一 泥障	壺刺
但紐共	
一 三尺革	壺掛
一 鞭	壺本
一 手鋤	壺掛
一 口取繩	壺掛
一 三階大房	壺通
一 鏡轡	壺通
一 馬柄杓	壺本
但紐共	
一 布腹帯	壺筋
一 手綱	壺筋
一 掛物	十幅
一 翠簾屏風	五双
一 書棚	壺
一 料紙硯箱	壺通
一 御書翰箱	壺通
一 黒塗 外箱	壺
但革覆、杵棒共	

右は明十二日御見分御座候様仕度、尤外国奉行えも申談、此段奉伺候、以上  
申正月十一日

川村助次郎  
松永半六

【史料 19】

- 一 前二留有之御品々、今朝御見分可被成旨、被仰渡候二付、直々夫々え申聞、柳之間え飾附、後刻柳之間にては明り取不宜候二付、俄に帝鑑之間持運飾附致候様、立田六輔より談、品々飾附、御老若方御見分相済、奥御より上覧ニ相成、八半時頃相済、於柳之間、外国方立合、

半六相廻り、品々詰方為致、外国方え引渡相済、御目付・御同朋頭申込、引取来ル

- 一 馬柄杓黒塗にて不宜、出来合、青貝之方にて差出候様、御沙汰二付、名太屋祖父平え申付差出、半六より外国奉行え引合、後刻、組頭成瀬善四郎え申談、惣みちむ青貝内条之方にて極ル、明朝迄ニ房並鶴目取付、差出候様、職々え申付、名太屋え下ケ遣ス

上覧には、十三点にわたる馬具一揃いに、掛物十幅、翠簾屏風五双、書棚一架、料紙硯箱一点が取り揃えられ、またこの間、細工方において同時並行で準備されていた、条約の批准書と米国大統領宛て將軍国書を入れる「御書翰箱」とその黒塗りの外箱も、一覽に供されたことが分かる。幕閣による御見分、そして將軍（徳川家茂）による上覧は、午後3時頃までに終わり、その後、柳之間において、外国方の立ち会いの下、準備されていた内箱・外箱への梱包が、細工方によりなされ、この一月十二日の夕刻までに、大部分の贈品が外国方に引き渡された模様である。この時、使節団のポーハタン号乗船は6日後に迫っていた。

ただし馬具類のうち、馬柄杓は、黒塗りに仕立てられ御見分に出されていたが、黒塗りでなく「青貝」仕立てで出し直すように御沙汰があった。これを受け、細工方と外国方の間の相談で、青貝を「総みじん」に蒔いた装飾に仕立てることが決まり、鶴目金具を付け、飾り房を通した上で翌朝までに差し出すよう、細工方に指示がなされている。その後、完成した青貝馬柄杓（服紗共）一本は、正月十六日に、細工方から外国方へ引き渡された。また御見分の際、「約条外箱」（すなわち【史料18】で「黒塗 外箱」とある条約批准書を入れる外箱）についても、仕様の部分変更の御沙汰があり、細工方では急きょこれに対応することとなった。これについても急ぎ手直しの上、十六日に完成品の引き渡し<sup>(118)</sup>がなされた。

翌正月十七日には、正使・副使の新見・村垣から、大統領へ贈る大和錦十巻を「据台、入箱、詰綿共」渡すよう、納戸方へ向けて依頼が送られた。これを受け納戸方では同日、大和錦十巻を入れる内箱・外箱・中仕切り等を、内箱の梱包に使う萌黄色の袋や真田紐一揃いととも、細工方に注文<sup>(119)</sup>している。

これら全てはおそらく、正月十七日か十八日中には慌ただしく引き渡されたのであろう。正使・副使の新見・村垣・小栗を筆頭とする使節団一行は、翌正月十八日には、品川沖に碇泊する米艦ポーハタン号に乗船し、二十二日には、サンフランシスコへ向けて横浜を出航した。

### 3-1-5 細工方による報奨の要請、制作・準備費用

このように、一連の贈品の準備は、十一月二十七日に発令され、その後年末年始を挟んで一月半ばまでには完成と外箱・内箱の準備及び念入りな梱包が求められるという、極めてハードで急ピッチなスケジュールで行われることとなった。大部分の贈品を準備することとなった細工方の負担は、相当なものであったろう。その間の事情をよく窺わせるのが、遣米使節団の出帆後、万延元年二月に細工頭から若年寄酒井忠毗に宛てて上げられた以下の願書である。



【史料20】（「亜行御用留」贈品 fol.112-113）

右京亮殿

亜米利加国え被遣候御品々取扱候支配之者共、御褒美之儀奉願候書付

御細工頭

進物取次上番格

御細工所同心組頭改役勤方

村越丈之助

同勘定役

青木松太郎

村田織右衛門

同勘定役助

坪内七之助

同証文役

神山恒五郎

下札：本文丈之助儀、進物取扱上番格被仰付候者ニ付、

於御席御褒美被下置候様奉願候

右は亜米利加え被遣候御品々、急速出来方之儀、被仰渡候二付、書面支配之者共え、取扱申渡候段、去十二月中申上置、御用向為相勤候処、御買上物之外、御書翰箱・御掛物・翠簾屏風、其外新規出来之御品々、至て御日合も無之候処、一々絵形雛形等を以、外国奉行え引合仕、様柄巨細ニ取調、悉く手数相掛り、且此節別て御用向多端の儀ニ御座候間、混雑不仕様、取扱之者共手限ニ厚く申合、日々早出、居残、外出等仕、御日限通、御間ニ合候様、精々骨折相勤、聊御差支之儀御座無、臨時御用向、格別ニ骨折相勤候二付、以後為励、相応之御褒美、被下置候様仕度、此段奉願候、以上

申二月

川村助次郎

松永半六

戸田総八郎

右願書二月十一日佐藤清五郎を以総八郎上ル

アメリカに贈る増品の品々について、「急速出来方之儀」を仰せ渡され、御買上げの品々の他、御書翰箱や御掛物、翠簾屏風など新規に制作する品々もあり、準備の日数がごく限られる中、絵形や雛形を作って逐次外国奉行に確認しつつ、期限に間に合うよう早出・居残り・外出を重ね、大変な骨を折って期限に間に合わせたことについて、相応の褒美を求める願書である。ただ、これに対する直接の答書は、今のところ見当たらない。

さて、一連の贈品の準備・制作にかかった費用は、どれほどであったのであろうか。これについても、細工方で要された費用について記録が残っているので、以下に引いておこう。

【史料 21】（「亜行御用留」贈品 fol.115）

御勘定所え御断

御細工頭

高 金貳百四拾六両

銀貳拾五貫六拾壹匁壹分六厘

内

・銀拾六貫五百目

去ル未十二月為御内借請取

・金貳百七兩壹分

銀壹貫貳百四拾目

去ル申正月同断請取

御入用高分差引

一 金三拾八兩三分

此度可請取分

銀七貫三百貳拾壹匁壹分六厘

右は去々年申年、亜米利加国え被遣御用御買上物其外共、御用代残金銀、書面之通、臨時請取申度奉存候、御勘定所え被仰渡可被下候、以上

戊〔文久二年〕十二月

川村助次郎

戸田総八郎

大場竹宮

細工所で米国宛て贈品の準備のため要した費用として、合計額は金 246 両・銀 25 貫 61 匁 1 分 6 厘とし、このうち、安政七年十二月・万延元年正月にそれぞれ支払われた分を除く残金について、細工頭から勘定所に対し支払い要請をしている。その後、この分の支払いは同月中に行われた（贈品 fol.116）。

3-1-6 国務長官カスへの贈品の急きょ準備と品々の贈呈

ところでスミソニアン研究機構に残る遣米使節団の贈品には、国務長官カス宛ての贈品とされる馬具もある（E-14191-0）。これについては、上記で見た、大統領宛て公式贈品の準備過程に関する史料では、管見の限りほぼ言及されていないのであるが、使節団が帰還した後に正使・副使（新見・村垣・小栗）から出された万延元年十月二十五日付上申書に、<sup>(120)</sup> 関連する情報が見出される。

それによれば当初、「外国事務ミニストル」（国務長官）宛て贈品は、当該役職の人数や「位階」が不明であるため、大統領宛て贈品に対してどれほどのものをどれくらい用意すれば良いのか分からず、結局、渡航前に準備するのを見送ることとし、米国訪問の際にその周辺の事情を調べた上で、帰国後に送る予定であった。しかし訪問してみると、国務長官は一人で、大統領とはランク上明確な区別があり、かつ帰国後に贈品を送る場合は、国務長官の他、陸海軍長官や財務長官など同等の高官が他にも複数いて国務長官にだけ送るというわけにはいかないことが分かった。また老中から国務長官宛てに準備した書翰があるところ、贈品がないのも不体裁であるため、今回の訪問中に国務長官カス宛てに贈品を送るべきと現場で判断し、ちょうど副使の村垣淡路守が（予備の贈品として個人的に）持参していた鞍・籠は相応の品物だったので、これをカス宛て贈品に当てる臨機の決

断をしたことが報告されている。使節団一行は、この度の派遣に際し、訪問先で予定外に贈品が必要になった場合に備え、予備の贈品をあらかじめ準備し、現場での臨機の対応がある程度できるようにしてあった模様である。その中から、蒔絵装飾もそこそ上等な鞍鐙を選んだということであろう。

こうして最終的に取り揃えられた大統領及び国務長官宛て贈品が、米国政府側でどのように受領されたか、最後に、副使村垣淡路守範正の日記から関係箇所を引いて見ておきたい。まずこれら贈品は、使節団のワシントン到着とホワイトハウスでの大統領への謁見後、閏三月二十九日に、引き渡しのため、使節団一行が泊まるウィラード・ホテルのレセプション・ルームに陳列され、歓迎委員のサミュエル・F・デュボン大佐に贈品目録が渡された。

#### 【史料 22】

〔前略〕けふ大統領へ遣はさるゝ品々、客舎に飾付て、目録をジユホントへ渡す、其品々は眞の太刀一振、馬具一揃（蒔絵鞍鐙紅厚ふさ）、掛物十幅（絹大堅物、画様各種極彩色、狩野住吉の画家の筆なり）、翠簾、屏風十隻、純子堅幕一対、ミニストル、レウキス、カスへ下されの品々、鞍鐙（桐に鳳凰蒔絵）に目録を添へ、はた正興、をのれ、忠順より大統領へ贈る蒔絵火鉢三、同食籠一対ともに渡しける、とみに持行もせず、三四日其儘飾置て、士官男女毎に來りていと珍しがりて見物し、新聞紙屋は其品を写真鏡にかけ、新聞紙に出し扱して後に大統領のかたへ送りしなり、かゝる品々、大統領の所持にはならず、その事どもを記録して、百物館に納る事よし、都て吏人へ贈りし品とて、大統領出して彼の館に納る事とて、己がものにはならず、されば如何成品もワイフ（妻女のことなり）へとて贈れば、我ものとなるよしなり、<sup>(121)</sup>

贈品は三～四日間ホテルに飾り置かれ、その間一般の展示に供されるとともに、新聞報道で紹介されたらしい。なお大統領や「吏人」へ贈られた品々は、その「ワイフ」に贈らない限り、「百物館」に納められることが、ここで既に言われている。これはパテント・オフィスのことで、四月二日、使節団一行はこの場所を訪れ、その「高堂」の中で、「華盛頓の独立戦争の図」、「種々奇功の機関の雛形数百種」、「各国の条約書」等のほか、「我国の農具」や、「先年ミニストル、ハリスに賜りし時服は其儘掛て有」<sup>(122)</sup>るのを見た。ここからして、ペリー日本コレクション同様、ハリスの時服や遣米使節団の贈品は、いったんこのパテント・オフィスに納められてから、スミソニアン研究機構にやがて移管された模様である。

四月六日、一行が大統領主催の晩餐に招待され、ホワイトハウスを再び訪問すると、そこには大統領宛てに贈った贈品が、馬具類を初め飾り付けられてあった。使用法や、翠簾屏風の素材などについて、話題が弾んだようである。

#### 【史料 23】

〔前略〕〔ホワイトハウスでの大統領招待による晩餐の席で〕かくてもとの席に出れば、この度遣されの品々、馬具をはじめ飾て有、用ひ方など聞たり、翠簾屏風は殊更に珍重し、何をもて作りたるものとおふ、竹をもて造りたりといへば、バンブー（竹の事也）とてめでけり（竹は米利堅にはなし、西洋にもなきものといふ）、女三人へ帯地に羽二重など贈りければ悦たり、<sup>(123)</sup>やはてけふの事ども厚く謝して旅舎に帰りぬ。

ワシントン滞在中も終盤の四月十四日には、「スミスオニオという奇品または究理の館なるよしへ行く。百物館と同じく石造の高堂なり」と、スミソニアン博物館見学をした（第一章 pp.103～104 参照）。これと同じ日、贈品の馬具類を実際に馬に仕掛けるため、外国奉行支配組頭の成瀬善四郎がホワイトハウスに送られ、ブキャナン大統領や姪のハリエット・レーンが見守る中、乗馬の実演もなされた。

#### 【史料 24】

〔前略〕けふ大統領の広庭にて遣されの馬具を馬に仕掛度よしにて、下司を招けるまゝ、成瀬正典〔善四郎〕刑部某を遣して馬に仕掛たるが、大成馬にて、美事なりとて、大統領も姪も出て見物し、正典に乗るべきよしすゝむるとて、乗れば大に悦びたるよし。後に聞けば正典等かえりて後、姪女レエン乗馬せしといふ、<sup>(124)</sup>

その後フィラデルフィア、ニューヨークを訪問した<sup>(125)</sup>後、一行は、万延元年五月十六日（1860年6月30日）、同港から米艦ナイアガラ号に乗船し、大西洋・インド洋を経由して、江戸に帰還した。

#### むすび

以上、スミソニアン研究機構に所蔵されるペリー日本コレクション、ハリス由来の時服、遣米使節団招来の贈品について見てきた。上記からは、同機構の幕末日本関係コレクションが、いかに充実しているのみならず、それらの由来や背景に関わる史料がいかに豊富に残り、高度にドキュメンテーション可能な形で資料群が残っていることが、理解されることと思う。これは稀有な事例であり、資料群の価値を高めている。

なかんづく注目されるのは、これらのコレクションが有する、幕末の徳川外交の実践様態を鮮やかに映し出す鏡としての性格である。ペリーやハリスに体现された米国は、日本の政体が近代的な条約を結んだ初めての国となり、それに伴って徳川政権が始めざるを得なくなった従来の「通信」「通商」国以外との増進品外交は、朝鮮やオランダとの関係の先例を踏まえながら新規に対応を模索し、米国以外の条約国にも適用していくための、最初のモデルケースとなった。<sup>(126)</sup>そこにはおそらく、米国人を夷狄とみるか礼楽をわきまえた交隣の相手とみるかをめぐる葛藤があり、増進品や下賜品の選定や準備過程は、そうした認識の揺れや変遷と無関係ではなかったと思われる。加えて、ペリー日本コレクション中には、ペリー一行の希望品リストに応じて幕府が下田奉行所を通じ代価と引換えに引き渡した品々や、<sup>(127)</sup>下田や箱館の市場で一行が購入した品々と見られる資料が相当数含まれている。これは、通商を新規に認めないという原則の下、日米和親条約の第2条で限定的に認められた下田・箱館での欠乏品供給（<sup>(128)</sup>交易）を抜け道として、先方に渡った品々に他ならない。こうした鎖国の可及的維持体制の下における事実上の限定的交易で販売された品々の具体例としても、これらの資料は貴重な証言力を持つ。またハリス由来の時服は、近世に江戸参府を行ったオランダ商館長がしばしば下賜された時服と例えば比べた場合、どのような特徴を有するのであろうか。ハリスの初度登城の際の将軍謁見儀礼は、朝鮮通信使の謁見儀礼を先例として参照しつつ練られたことが近年の研究で明らかになっているが、<sup>(130)</sup>下賜された時服もまた、幕末外交の近世との連続性如何を考えるための素材となり得るであろう。遣米使節団の米国大統領宛て贈品は、その少し前に幕府が英国女王宛てに準備し（たが江戸城火災でいったん灰燼に帰し）た贈品にまつわる先例に部分的にも



準備された一方<sup>(131)</sup>、その後文久二年に派遣された遣欧使節団が欧州に持ち渡った各国君主宛て贈品が準備されるに際する重要な先例になったと見られる<sup>(132)</sup>。幕末の遣欧使節団に由来する贈品の調査が今後、欧州各国についても進展し、各国に残る徳川将軍の贈品の比較検討が可能になれば、例えば英国女王、米国大統領、フランス皇帝、プロイセン国王など、条約各国の君主に対して、幕府が贈品の格を意識的に差別化したのかどうかといった論点を含めて、幕末の徳川外交の儀礼的側面がより鮮明に見えてくるであろう。

豊富な外交関係史料とリンクする形で残っているスミソニアン研究機構の幕末日本関係コレクションは、こうした問題を読み解いていくための良質な素材となり、出発点となり得ると考えられる。今後の調査の進展が期待される所であり、本稿がそのきっかけを提供することを願う。

## 註

(1)——国立公文書館では万延元年遣米使節団関係の貴重史料を特別な許可で閲覧することができた。その調査研究活動報告は、横山伊徳「米国立公文書館所蔵万延元年遣米使節関係文書について」(本号 pp. 167)を参照。この閲覧は万延元年遣米使節子孫の会長(当時)村垣孝氏、同会理事(当時)宮原万里子氏のご尽力によって実現したもので、スミソニアン協会での調査も、これを機縁として実施する運びとなった。両氏及び同会には深く感謝申し上げる。

(2)——調査内容としては、写真撮影や機構側の資料の記述・分類の検討、他館所蔵の関連する文献資料の収集が、オンライン掲載される科研の実績報告書で言及されている。

<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-02045046/>

(3)——Chang-su Houchins, *Artifacts of Diplomacy: Smithsonian Collections from Commodore Matthew Perry's Japan Expedition (1853-1854)*. Smithsonian Contribution to Anthropology, Number 37. Washington DC: Smithsonian Institution Press, 1995.

(4)——近藤雅樹・佐々木史郎・水口千里・吉田晶子・木村裕樹編著『19世紀における日本在外博物学・民族学標本コレクションの実態調査—文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「我が国の科学技術黎明期資料の体系化に関する調査・研究」A06計画研究成果報告書—』(全136頁) p.102.

(5)——東京都江戸東京博物館編『特別展ペリー&ハリス～泰平の眠りを覚ました男たち』(江戸東京博物館・名古屋ボストン美術館, 2008年) pp.42-44(資料図版), pp.126-129(資料解説)。漆器、磁器、竹製品、脇差など15点のペリーコレクションが展示された。

(6)——石井孝『日本開国史』(吉川弘文館, 1972年), 加藤祐三『黒船前後の世界』(岩波書店, 1985年), 三谷博『ペリー来航』(吉川弘文館, 2003年), 西川武臣『ペリー来航』(中公新書, 2016年)。

(7)——大正八(1919)年第一回国際労働会議出席のため渡米した慶応義塾大学の田中一貞氏によってまとめられた。

(8)——雑誌『太陽』特集259号「贈り物繁盛記」(平凡社, 1983年) pp.70-71.

(9)——榊原悟『美の架け橋—異国に遣わされた屏風たち』(ペリかん社, 2002年) pp.232-242.

(10)——山田久美子「アメリカに渡った掛物絵—万延元年遣米使節贈答品—」(『ことば・文化・コミュニケーション』第4号, 2012年, pp.191-202)。ペリーが持ち帰った贈品についても、若干の紹介をしている。

(11)——東京大学史料編纂所編『大日本古文書 幕末外国関係文書』(旧東京帝国大学文科大学史料編纂掛/東京大学出版会, 1910年～)(以下、『幕外』とする), 維新史学会編『幕末維新 外交史料集成』第1～6巻(財政経済学会, 1942～44年/第一書房, 1978年復刻)(以下、『外集』とする)。

(12)——東京大学史料編纂所所蔵外務省引継書類「新見豊前守・村垣淡路守・小栗豊後守 並行御用留」中, 第1冊「出帆前之件」及び第3冊「増進品之部」に、贈品の準備過程に関する多数の記録が見出される。本史料の難読文字の解説に当たっては、横山伊徳氏のご助力を得た。記して深く感謝する。

(13)——Houchins, *Artifacts of Diplomacy*, op.cit., pp.1-4. 財部香枝「幕末における西洋自然史博物館の受容—万延元年(1860年)遣米使節団とスミソニアン・インスティテューション」(『博物館学雑誌』第24巻第2号(通巻

30号), 1999年) p.67.

(14)——Houchins, p.3.

(15)——財部前掲論文 (p.66) によれば, 初代の建物の完成は1855年。ハウチンズ解説 (p.4) では1858年。

(16)——Houchins, p.4.

(17)——Houchins 解説・詳細カタログに寄せられた Paul Michael Taylor 氏による Introduction (Houchins, p.iv)。1856年, 来日前の初代駐日総領事タウンゼント・ハリスがシャムを訪問してシャム米修好通商条約を調印し, それを受けてシャムの両国王から米国大統領へ贈られたもの。スミソニアン研究機構所蔵のタイ王室贈呈品コレクションについては, 以下の論考を参照。Paul Michael Taylor, William Bradford Smith, "Instruments of Diplomacy: 19<sup>th</sup> Century Musical Instruments in the Smithsonian Collection of Thai Royal Gifts." In: *The Journal of the Siam Society*, vol.105, 2017, pp.245-337.

(18)——Lisa McQuail, *Treasures of Two Nations: Thai Royal Gifts to the United States of America*.

Washington DC: Asian Cultural History Program, Smithsonian Institution, 1997. その後さらに2018年3月～6月には, バンコクの Queen Sirikit Museum of Textiles で, "Great and Good Friends: 200 Years of U.S.-Thai Friendship" と題する展示が行われ, スミソニアン研究機構所蔵の19世紀シャム・コレクションが出品された。

(19)——財部「幕末における西洋自然史博物館の受容」(前掲)。なお使節団訪問の際, ホワイトハウスに飾られていたペリー招来の日本コレクションも一部あった(山田「アメリカに渡った掛物絵」前掲 p.194)。副使村垣淡路守範正の「航海日記」は, 大統領への謁見のためホワイトハウスを訪問した際, ペリーコレクションの一部を控え室で目にしたことを, 次のように記している。「おのれらが席は楕円の形にして, 七間に四間もあるべし。花やかなる藍もて文を出せし敷物。前に三口, 玻璃の障子にして内に戸張を掛け, これも同じ色の織物なり。四方に大なる玻璃鏡を掲げ, 前に卓をおき, わが国の蒔絵の料紙・硯・その他さまざまかざりてあり。こはペリリ渡来の時, 遣わされし物と聞こゆ」(日米協会編『万延元年第一遣米使節日記 復刻版』日米協会, 1977年, pp.106-107)。ハウチンズ氏は, これらが遣米使節団を接待するために, スミソニアン・ビルディングからホワイトハウスへ送られたものと推測している (Houchins, p.4)。

(20)——佐野鼎『萬延元年訪米日記』金澤文化協会,

1946年, pp.59-60.

(21)——森岡太郎「亜行日記」(『万延元年遣米使節史料集成』第一巻, 風間書房, 1961年, p.163.

(22)——パテント・オフィスは, 明治初年の岩倉使節団も訪れたワシントン中樞の施設で, 『特命全権大使米欧回覧実記』第一巻に図版付きで言及されている。それによれば, 同館は新発明の機械, 模型などを分野別に陳列する壮麗な建物で, 中央郵便局と向かい合う位置にあった(『特命全権大使米欧回覧実記』第1篇「米利堅合衆国ノ部」第十二巻「華盛頓府之記中」, pp.216-218)。

(23)——現在はスミソニアン研究機構傘下の Arts and Industries Building。

(24)——現在はスミソニアン研究機構傘下の The National Museum of Natural History。

(25)——以上, Houchins, pp.4-5 及びスミソニアン国立自然史博物館ウェブサイト中の "A Brief History of NMNH" (<https://naturalhistory.si.edu/about/brief-history-nmnh>) (参照 2020-03-20)。

(26)——ただし同種の複数の資料が同じ資料番号の下にまとめられ1点となっている場合も少なくない(例えば煙管, 筆, 鎌などの場合, 複数の煙管, 複数の筆, 大小の鎌が, それぞれ同一の資料番号の下にまとめられている)。

(27)——画題は鶴に松, 菊・菖蒲・松, 月に鉄線花, 富士に竹, 夕日に鶴, 米国使節団員の似顔絵など。

(28)——「江戸名所 水のおもかげ」(広重), 「水のながめ」(豊国), 「艶曲揃」(国芳), 「上総本更津房総名所」(広重), 「三婦久対」(国芳)。

(29)——1854年, 下田でポーハタン号に供給された品々のリスト。「ポルトメンえ, 酒 壺樽, さつま芋 壺俵, 菜 壺束, 卵 百, 白砂 壺包」

(30)——「呈 ポートメン 平山謙二郎, 合原猪三郎」

(31)——目録の巻末に以下の文献が引用されている(アルファベットを日本語に直した)。小松大秀『日本の美術 229号: 漆工』至文堂, 1975年 (94頁)。

(32)——American Want List の略号で, 『幕外』第6巻141号収載の「米人所望品」の目録を指す。詳しくは後述参照 (以下同様)。

(33)——SMLは "Shimoda machi-bugyo" list の略号で, 『幕外』第8巻230号収載の「米人へ譲渡品」の目録を指す。

(34)——NGLは "Nyoze gamon" list の略号で, 『幕外』第4巻396号「正月米船江戸内海渡来一件聞書及覚書」(典拠は「如是我聞」) に収載される, 横浜での日米和親条

約調印の際に日本側から贈られた贈品目録を指す。

(35)——HLはHora Tomio's list of Japanese presentsの略号で、サミュエル・ウェルス・ウィリアムズ著・洞富雄訳『ペリー 日本遠征随行記』(雄松堂書店, 1970年)で訳出されたウィリアムズの日誌記載の贈呈品目録を指す。

(36)——KORLは“Kokui osetsu roku” listの略号で、『幕外』第5巻191号「二月二十六日將軍老中並亜米利加応接掛より米人への贈品目録」に収載された、林大学頭禮著「墨夷応接録」を典拠とする贈呈品目録を指す。従って正しくはBORL。

(37)——略号の意味はそれぞれ以下の通り。1859-ACB: 1859 Smithsonian Institution Anthropology catalog, book number 1/ 1953-AL: 1953 Smithsonian Institution Accession list/ USNM: Collections of the former United States National Museum/ ECC: Ethnology Collection [Card] Catalog/ NMAH-DT: Smithsonian Institution, National Museum of American History, Division of Textiles.

(38)——井戸対馬守, 伊澤美作守。1854年の横浜(神奈川)での日米和親条約の調印後, 追加交渉のため, 応接掛として, 林大学頭, 鷗殿民部小輔とともに下田に派遣された。

(39)——『幕外』第6巻204号収載の「五月十四日亜米利加応接掛より米人への贈品目録」中, 偃月刀(太刀の一種), 槍, 短刀, 鏡などの他, 「七種」の「青花瓷器」(染付陶磁器の一種)が贈られている。

(40)——以下で, 「」内はハウチンズ氏が付録のそれぞれに付けた英文タイトルを邦訳した。( )内は, その下に付記された典拠に関するハウチンズ氏の記述の抜粋訳で, より完全な典拠情報は脚注に記載した。[ ]内に記載したHNL, PJIなどの略号は, 各資料の記述の備考欄で, 資料の由来が推定される際に参照された典拠史料を表す略号である(目録pp.13-14に略号一覧が掲げられている)。

なお付録I~IXのうち, IとII, IIIAとIIIC, IIIBとIIIDは, 同じ際に贈られた品々に関する異なる典拠史料の目録と見られる。同一の品々のリストであるはずでも, 記録者が異なると品目が微妙に異なっている場合があり, そうした点を踏まえ, いずれも付録として引用されたものであろう。

(41)——Francis Hawks, *Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan, Performed in the Years 1852, 1853, and 1854, under the*

*Command of Commodore M.C. Perry, United States Navy, by Order of the Government of the United States.* New York: D. Appleton and Company, 1856.

(42)——Roger Pineau (ed.), *The Japan Expedition 1852-1854: The Personal Journal of Commodore Matthew C. Perry.* Washington DC: Smithsonian Institution Press, 1968, pp.194-196.

(43)——『幕外』6巻204号「五月十四日亜米利加応接掛より米人への贈品目録」収載。

(44)——正しくはBORL: Bokui osetsuroku listとすべきである。註36参照。

(45)——IIIAはIIICに対応すると思われ, 1853年6月18日〔嘉永六年五月十二日〕の誤りではないか。

(46)——サミュエル・ウェルス・ウィリアムズ著・洞富雄訳『ペリー 日本遠征随行記』(雄松堂書店, 1970年)収録, 付録四, p.482。

(47)——同上, pp.484-485。

(48)——沖縄県沖縄史料編集所編『沖縄県史料 前近代2 ペリー来航関係記録I』(沖縄県教育委員会, 1982年) pp.414-415。

(49)——同上, pp.543-544。

(50)——Allan B. Cole (ed.), *A Scientist with Perry in Japan: The Journal of Dr. James Morrow.* North Carolina: University of North Carolina Press 1947, pp.230-233: List of Specimens in Arts Manufactures & c., bought in Hakodadi Japan Lat 42 1/2 N; List of Specimens in Natural History arts Manufactures & bought in Simoda Japan 32 1/2 Degrees N. Latitude & bought to the U.S.

(51)——典拠の応接掛(林大学頭, 井戸対馬守ほか)上申書の日付は嘉永七年四月二十七日(1854年5月23日)付であり, 5月23日の誤りか。

(52)——『幕外』第6巻141号「四月二十七日亜米利加応接掛上申書, 老中へ, 米国人所望品の件」収載。

(53)——Pineau (ed.), *The Personal Journal of Commodore Matthew C. Perry.* op.cit., p.233.

(54)——F. W. Williams (ed.), *A Journal of Perry Expedition to Japan (1853-1854) by S.Wells Williams.* Yokohama: Kelly & Walsh, 1910.

(55)——ウィリアムズ著・洞富雄訳『ペリー 日本遠征随行記』(前掲)収録, 付録四「ペリー艦隊沖縄来航関係薩摩藩那覇在番奉行届書」p.482 (Appendix IIIA)。沖縄県沖縄史料編集所編『沖縄県史料』(前掲)収録「旧琉球藩評定所書類」pp.414-415 (Appendix IIIC)。

(56)—— 将軍から米国大統領・ペリー以下遠征団員への下賜品、幕府側応接委員や老中から使節団員への進物など。

『幕外』第4巻396号「正月米船江戸内海渡来一件聞書及覚書」(「如是我聞」) 収載の「亜米利加国王へ御進物」, 「使節へ被下候分」, 「林大学頭様より夷人へ進物」, 「井戸対馬守殿より進物」, 「鶴殿民部小輔殿より進物」, 「松崎満太郎殿より進物」, 「阿部伊勢守殿より進物」, 「牧野備前守殿より」, 「松平和泉守殿より」, 「久世大和守殿より」, 「内藤紀伊守殿より」(NGL: “Nyoze gamon” list)。

『幕外』第5巻191号「二月二十六日将軍老中並亜米利加応接掛より米人への贈品目録」。異なる史料に見出される複数の史料目録が本号に収載されており、それぞれの典拠史料は以下の通り。①「町奉行書類所収外国事件書陣営日記」、②「町奉行書類所収外国事件書」、③「墨夷応接録 続通信全覧類輯 外交紀事本末底本書院貢献贈答始末記」。うちハウチンズ氏の詳細カタログでは③がKORL (“Kokui Osetsuroku” list)として参照されている。

(57)—— 『幕外』第6巻204号「五月十四日亜米利加応接掛より米人への贈品目録」(「墨夷応接録」)(応接掛は林大学頭、井戸対馬守、伊澤美作守、鶴殿民部小輔)(SGL: Shimoda gift list)。

(58)—— 『幕外』第6巻141号「四月二十七日亜米利加応接掛上申書 老中へ 米人所望品の件」(「町奉行書類所収外国事件書」)(AWL: American Want List)。

(59)—— 『幕外』第8巻230号「安政元年(月日未詳)下田取締掛町奉行上申書 老中へ 米人へ譲渡品の件」(「町奉行書類所収外国事件書」)(SML: “Shimoda machi-bugyo” list)。「ハウチンズ氏は同史料の典拠を「下田町奉行所」の文書と見なしているが、これは誤りで、典拠となった「外国事件書」を収載する「町奉行書類」は、江戸の南北両町奉行所の記録(国立国会図書館所蔵「旧幕府引継書」収載)である。

(60)—— ウィリアムズ著・洞富雄訳『ペリー 日本遠征随記』(前掲) 収録、付録四「ペリー艦隊沖繩来航関係薩摩藩那覇在番奉行届書」p.484-485 (Appendix IIIB)。沖縄県沖縄史料編集所編『沖縄県史料』(前掲) 収録「旧琉球藩評定所書類」pp.543-544 (Appendix IIID)。

(61)—— 以上の典拠史料は「町奉行書類所収外国事件書 陣営日記」。

(62)—— Dallas Finn, *Guests of the Nation: The Japanese Delegation to the Buchanan White House*. In: *White House History*. No.12. Washington: White House Historical Association 2003, p.32; William G. Allman,

*The White House Collection From James Buchanan's Time*. In: *ibid.*, p.65; 山田「アメリカに渡った掛物絵」(前掲) p.194, 202。これらの文献では、ペリーが日本から持ち帰ったと日記に記されている蒔絵書棚 (gold lacquered bookcase) 及び蒔絵文机 (lacquered writing table), としてのみ言及されている。

(63)—— Houchins, pp.3-4.

(64)—— Cole (ed.), *The Journal of Dr. James Morrow*, op.cit., p.233.

(65)—— 佐野真由子『幕末外交儀礼の研究—欧米外交官たちの将軍拝謁』思文閣出版、2016年、付表「使節の登城・拝謁」(pp.400-401)。

(66)—— Mario Emilio Cosenza (ed.), *The Complete Journal of Townsend Harris: First American Consul and Minister to Japan*. Charles E. Tuttle Company: Rutland, Vermont & Tokyo, Japan (revised second edition), 1959, pp.468-480; Harris to Lewis Cass, Secretary of State, dated in Yedo, Dec. 10, 1857 (Letterbook 3, Nr.51: Letters and Papers of Townsend Harris, City College of New York).

(67)—— Cosenza(ed.), *The Complete Journal of Townsend Harris*, op.cit., p.478; 坂田精一訳『ハリス 日本滞在記(下)』岩波書店、1954年、p.79。基本的に坂田の翻訳に基づき引用したが、原文と照合して若干の修正を行った。なお kabya という語が未詳だが、silk kabyas でグーグル検索をすると、インド・ミャンマー方面の女性用絹織物の衣装を示す画像や情報が多数出てくる。ハリスはインド地方での滞在歴があり、その際に学んだ現地言葉ではないか。

(68)—— 『新訂増補 国史大系 続徳川実紀 第三篇』(吉川弘文館、1935年) p.432。

(69)—— 東京大学史料編纂所「維新史料網要データベース」収載(『維新史料網要』第2巻 p.429)。

(70)—— Harris to Lewis Cass, Secretary of State, dated in Shimoda, January 14, 1859 (Letterbook 4, Nr.62: The Letters and Papers of Townsend Harris, City College of New York). 拙訳による。

(71)—— Harris to Lewis Cass, dated in Shimoda, February 22, 1859 (Letterbook Nr.4, Nr.68: *ibid.*)

(72)—— 外務省編『締盟各国条約類纂』(日就社、1874年) p.62.

(73)—— NARA, Record Group 59: General Records of the Department of State, 1763-2002; Series: Notes from Japan Regarding the Treaty of Yedo, 1860-1862; Item:



List of Presents to the President of the United States.

(74)——東京大学史料編纂所蔵外務省引継書類「亜行御用留」第一冊「出帆前之件」所収、新見・村垣・小栗の安政六年十一月十一日付老中間部下総守宛て上申「亜米利加大統領へ相贈候品其外之儀二付申上候書付」。

(75)——『万延元年遣米使節図録』の編者田中一貞氏が、ワシントンの「国立博物館にて人種学部長ホッフ博士と相識り其好意にて同使節が米国へ持参せし贈呈品の同館に保存しあるものを撮影することを得」た際に撮影されたものか(同書、序文 p.1)。ただし、国立博物館でこの際に撮影された他の贈品の図版(馬具、蒔絵火鉢)は、掛絵とは離れて図録の前半(使節団のワシントン訪問を扱う部分)に掲載されており、一方掛絵の図版は図録の後半(使節団のニューヨーク訪問を扱う部分)に掲載されている。

(76)——Centennial Exhibition Philadelphia, Pa.)

*Frank Leslie's Historical Register of the United States Centennial Exposition, 1876.* New York: Frank Leslie's Publishing House, 1877, p.252.

(77)——註76に同じ。

(78)——筆返しの部材が別置されている可能性があり、確認を要する(日高)。

(79)——扉が別置されている可能性があり、確認を要する(日高)。

(80)——鞍・鎧・あおり・したぐら・馬氈・力革・三尺革・しりがい・鞭が、2018年秋調査時の記録写真から確認できる。大統領への贈呈品に準備された馬具一式として、日本側史料(亜行御用留)で挙げられているものは他に、轡、四緒手、手鋤、口取縄、布腹帯、手綱があるが(【史料18】)、これらは確認できていない。轡・四緒手は金工品なので、別置されている可能性があるか(日高)。

(81)——「フェルト製」という記述が正しければ、日本のものではない。フェルト(毛氈)はアジアからも欧州からも輸入していた。写真からは産地の判断はつかないが、輸入品を贈品に用いた可能性もあるかもしれない(澤田)。

(82)——『幕外』第27巻137号。

(83)——『幕外』第18巻35号。

(84)——『続徳川実紀』「昭徳院伝御実紀」安政六年十月十七日条(pp.634-635)、榊原悟『美の架け橋』(前掲) p.281。

(85)——『維新史料綱要』第3巻 p.130(安政六年一月十七日条)、『通信全覧』初編、類輯提要八、献呈品並贈品、英国之部(第二巻 p.848)、榊原前掲書 p.281。

(86)——当初、楽器一揃いと提案された際、具体的には、琴、箏(そう)、笙(しょう)、箏(ひちりき)、笛、太鼓、

鉦鼓(しょうこ)、鞆鼓(かっこ)からなる雅楽の弦楽器・管楽器・打楽器が想定されていた(『外集』第4巻, p.152)。

(87)——以上、『外集』第4巻, pp.151-162より。

(88)——『幕外』第30巻53号。

(89)——『幕外』第30巻116号、東京大学史料編纂所蔵外務省引継文書「亜行御用留」第3冊、増進品之部(以下、「亜行御用留」贈品とする) fol.1-3。

(90)——ただし安政六年十月の江戸城火災でいったん消失。その後改めて準備され、万延元年十一月に英国公使オールコックへ引き渡される(榊原『美の架け橋』 p.256, 285)、『通信全覧』第二巻, p.858(初編、類輯提要八、献呈品並贈品、英国之部)、『幕外』第44巻9号(万延元年十一月二日、英国特命全権公使オールコック書翰、外務大臣へ、女王宛將軍贈物送付の件)。

(91)——『幕外』第30巻116号、「亜行御用留」贈品 fol.1-2。

(92)——『幕外』第30巻136号、「亜行御用留」贈品 fol.29。

(93)——『外集』第4巻 p.165、「亜行御用留」贈品 fol.3-4。

(94)——『外集』第4巻 p.152。

(95)——岡田譲編、東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館監修『日本の美術 No.3-調度』(至文堂, 1966年) p.47。参照、清武雄二・神戸航介・堀部猛・古田一史『『延喜式』巻一七「内匠寮」現代語訳(稿)』(『国立歴史民俗博物館研究報告』第218集, 2019年, pp.127-154)。

(96)——『統通信全覧』類輯之部七、「新見豊前守等米国渡航本條約書交換一件」十六, p.550-551。図28右の「帳八帖」に見える解説文は以下の通り。「冬表練平絹額 額文裏同白/夏生平絹白泥ニテ野篠秋草等画/又地合等 美麗ニ調候事モ相見候/紐長九尺/色 蘇芳濃色 二色を中折ニシテ縫合/燕ヲ画ク/長九尺四方之分」。

(97)——川本重雄・小泉和子編『類從雜要抄指図巻』(1998年、中央公論美術出版) pp.67-68, pp.195-197。清武雄二氏、篠崎尚子氏のご教示による。

(98)——東京大学史料編纂所蔵外務省引継書類「新見豊前守・村垣淡路守・小栗豊後守 亜行御用留」第1冊「出帆前之件」(以下、「亜行御用留」出帆前とする) fol.114。

(99)——『外集』第4巻 p.160、「亜行御用留」贈品 1344。

(100)——『幕外』第31巻107号、「亜行御用留」出帆前 fol.205-206。

- (101)——「亜行御用留」贈品 fol.65-69.
- (102)——『幕外』第31巻75号,「亜行御用留」贈品 fol.43-46.
- (103)——「亜行御用留」贈品 fol.31.
- (104)——『外集』第4巻 p.169,「亜行御用留」贈品 fol.31。なお文久二(1862)年に遣欧使節からフランスのナポレオン3世に贈られた掛物10幅(フォンテヌブロー宮殿所蔵)の漆塗軸端のうち4点が,上記の絵形の意匠(図31の宝尽・房桜・松唐草・千鳥)と一致しており,紅葉蒔絵の軸も見られる(日高)。これは,その後の幕府遣欧使節団派遣の際フランス皇帝に送られた将軍の贈品が,万延元年遣米使節団の際の米国大統領宛て贈品の先例に,部分的にも従う形で準備されたことを示唆している。
- (105)——「亜行御用留」贈品 fol.89-90。田島志一編『東洋美術大観』第五冊(審美書院,1909年)p.378 収載の狩野探原守経の年譜には,「万延元年 英吉利国へ被遣御屏風絵御用相勤、同亜米利加国へ被遣御掛物御用相勤、御褒美頂戴仕候」とある。
- (106)——『幕外』第30巻136号,「亜行御用留」贈品 fol.29.
- (107)——「亜行御用留」贈品 fol.35, 39 など。
- (108)——『外集』第4巻 p.170,「亜行御用留」贈品 fol.44-45.
- (109)——『外集』同前,「亜行御用留」贈品 fol.41.
- (110)——『幕外』第31巻119号,「亜行御用留」贈品 fol.58.
- (111)——【“享保尺”】,国史大辞典, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com> (参照 2020-03-10)
- (112)——「亜行御用留」贈品 fol.70.
- (113)——『幕外』第32巻140号,「亜行御用留」贈品 fol.75-78.
- (114)——“村垣範正”,国史大辞典, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com> (参照 2020-03-09), 日米協会編『万延元年第一遣米使節日記』(前掲)収録「村垣家家譜抄録」pp.16-18.
- (115)——『外集』第4巻 p.156.
- (116)——「亜行御用留」贈品 fol.89.
- (117)——「亜行御用留」贈品 fol.101-104.
- (118)——「亜行御用留」贈品 fol.107.
- (119)——『外集』第4巻 pp.177-178,「亜行御用留」出帆前 fol.142.
- (120)——『外集』第4巻 p.180,『統通信全覧』類輯之部,第七巻 p.576.
- (121)——日米協会編『万延元年第一遣米使節日記』(前掲)所収,村垣範正「航海日記」pp.111-112.
- (122)——同前, p.122.
- (123)——同前, p.137-138.
- (124)——同前, p.147.
- (125)——使節団の旅の詳細については,宮永孝『万延元年の遣米使節団』(新潮社,1990年)を参照。
- (126)——参照,榊原悟『美の架け橋』(前掲)。
- (127)——『幕外』第8巻230号.
- (128)——『締盟各国条約類纂』(前掲)p.2.山本有造「下田「欠乏品交易」とその貨幣問題—ペリーとハリスのはざままで」(『経済史研究』19号,2016年)。
- (129)——三谷博『ペリー来航』(前掲)。
- (130)——佐野真由子『幕末外交儀礼の研究』(前掲)。
- (131)——例えば,米国大統領宛て馬具類や翠簾屏風を入れる箱を準備する際,英国女王宛て贈品のためにいったん準備した箱の仕様の先例が参照されている(馬具類についてはその先例が踏襲され,翠簾屏風については,時間的制約のため英国宛ての先例の「黒塗」が「黒搔合式篇塗り」に変更された。「亜行御用留」贈品 fol.49-50)。
- (132)——参照,鈴木廣之「幕末外交のなかの美術工芸品—フォンテヌブロー宮の江戸絵画を中心に」(近刊の展覧会図録所収)。註104も参照。
- (133)——山田前掲論文「アメリカに渡った掛物絵」は,オランダ国王やイギリス女王に金地屏風が贈られ,米国大統領には掛物が贈られたことから,徳川外交が国を格付けしていた可能性を示唆している。ただし執筆代表者(福岡)は,この見解に現段階で懐疑的である。金地屏風は相当の準備期間を要するものであり(例えば安政三(1856)年にオランダ国王ウィレム三世に贈られた屏風絵の一双は,発令から完成までに五ヶ月間かかっている。榊原前掲書,pp.263-264),米国大統領宛て贈品にかけられた準備期間(一ヵ月前後)ではとうてい制作は無理であった。
- なお同時代に同様の西洋諸国と修好通商条約を結んだシャム(タイ)の王室は,交渉相手の西洋諸国の外交代表らを明らかに格付けして対応を差別化しており,シャム国王が各国の君主/大統領に贈った贈品も差別化されていた可能性が高い(参照, Taylor, Smith, “Instruments of Diplomacy: 19<sup>th</sup> Century Musical Instruments in the Smithsonian Collection of Thai Royal Gifts,” op.cit.)。この問題については,今後刊行予定の『国立歴史民俗博物館研究報告』特集号「近世近代転換期東アジアの外交と通商—海域世界の秩序変動」に収録する福岡万里子「米使ハリスの1856年対シャム条約交渉—パウリングの経験との比較から」でも扱う予定。

---

〔付記〕本稿は、平成30年度人間文化研究機構若手研究者海外派遣プログラム及び平成27～30年度JSPS科学研究費（若手研究B、課題番号15K16816）による研究成果の一部である。

福岡万里子（国立歴史民俗博物館研究部）

日高 薫（国立歴史民俗博物館研究部）

澤田和人（国立歴史民俗博物館研究部）

（2020年4月9日受付，2020年7月9日審査終了）



図1 Nr.9 “lacquered stationary box”  
 (スミソニアン国立自然史博物館データベース)

[http://collections.si.edu/search/detail/edanmdm:nmnhanthropology\\_8476154?q=Commodore+Matthew+C.+Perry&record=83&hlterm=Commodore%2BMatthew%2BC.%2BPerry&inline=true](http://collections.si.edu/search/detail/edanmdm:nmnhanthropology_8476154?q=Commodore+Matthew+C.+Perry&record=83&hlterm=Commodore%2BMatthew%2BC.%2BPerry&inline=true)  
 E71-0, © Department of Anthropology, Smithsonian Institution



図2 文机 (ホワイトハウス所蔵)  
 © White House Historical Association



図3 違い棚 (ホワイトハウス所蔵)  
 © White House Historical Association



図4 Nr.77 “Family Shinto altar”  
 (スミソニアン自然史博物館データベース)  
<http://n2t.net/ark:/65665/39d62c7c2-8714-4953-a870-651b089c11ce>  
 E302-0, © Department of Anthropology, Smithsonian Institution





① E14178-0  
 ※【史料5】に言う「段熨斗目 式ツ」のうちの一つか。



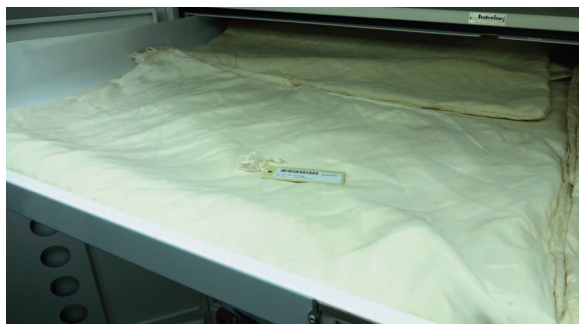
② E14179-0  
 ※【史料4】に言う「紅紗綾 二」の一つか（【史料5】では「紅綾織 式」と表記）。



③ E14180-0  
 名称：七宝鉄線模様夜着  
 材質・技法：紅平絹・染  
 法量：丈（襟を含む）165.0 cm，衿 77.9 cm，衿下がり 42.0 cm，襟幅 21.3 cm  
 ※【史料5】に言う「紅白浅黄ちらし ハツ」が「紅地・白地・浅黄地で散し模様」の意味であれば，そのうちの一つか。



④ E14181-0  
 ※同じく「紅白浅黄ちらし ハツ」の一つか。



⑤ E14181-1  
 ※【史料5】に言う「白羽二重 弐ツ」のうちの一つか。



⑥ E14181-2  
 ※同じく「白羽二重 弐ツ」のうちの一つか。



⑦ E14183-0  
 名称：縞模様夜着  
 材質・技法：縞織練緯・締切緋  
 法量：身丈 158.2, 衿 85.9 cm, 袖丈 61.0 cm, 袖幅 41.0 cm, 衿下がり 45.0 cm,  
 襟幅 17.0 cm  
 ※【史料5】に言う「段熨斗目 弐ツ」のうちの一つか。



⑧ E14184-0

名称：笈桜唐草模様夜着

材質・技法：浅葱紗綾・染

法量：身丈 161.2 cm, 衿 77.4 cm, 袖丈 70.0 cm,

袖幅 37.0 cm, 襟肩あき 16.0 cm

※【史料5】に言う「紅白浅黄ちらし ハツ」が「紅地・白地・浅黄地で散し模様」の意味であれば、そのうちのの一つか。



⑨ ET9042-0

名称：中啓牡丹唐草模様夜着

材質・技法：白紗綾・染

法量：丈（襟を含む） 171.0 cm, 衿 85.0 cm, 袖丈 72.0 cm, 前身幅 40.1 cm, 衿幅 14.4 cm,

衿下がり 40.0 cm, 襟幅 17.0 cm

※同じく「紅白浅黄ちらし ハツ」の一つか。

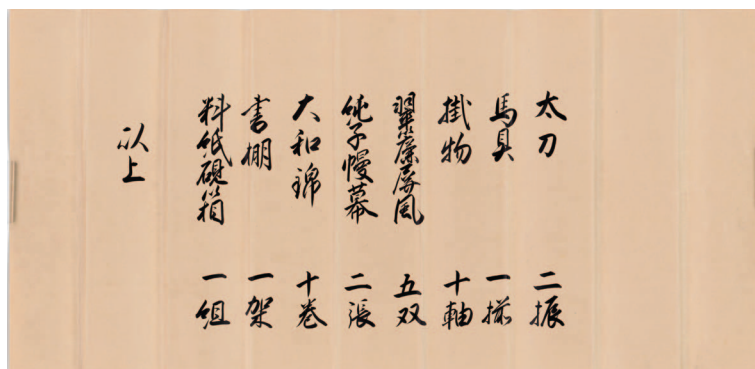


図5 米国大統領への贈品目録 (米国国立公文書館データベース)  
<https://catalog.archives.gov/id/6883719>



図6 「大統領に献じたる掛物」  
 (国立国会図書館デジタルコレクション  
 『万延元年遣米使節図録』)  
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1920856>



図7 蒔絵火鉢三脚と蒔絵食籠一對?  
 (スミソニアン図書館デジタルコレクション)  
<https://doi.org/10.5479/sil.976321.39088016526683>



図8 牡丹蒔絵螺鈿火鉢 (スミソニアン国立  
 自然史博物館データベース)  
<http://n2t.net/ark:/65665/31cf6f252-6169-4475-9ab5-793fa51192ea>  
 E322-0, © Department of  
 Anthropology, Smithsonian Institution



図9 遣米使節団招来の贈品と見られる資料  
 (スミソニアン図書館デジタルコレクション)  
<https://doi.org/10.5479/sil.976321.39088016526683>





図 10 葡萄時絵螺鈿火桶 (スミソニアン  
国立自然史博物館データベース)  
<http://n2t.net/ark:/65665/3a23c9ff4-2b6d-4bbb-ad83-cbc230e60cb1E323-0>, © Department of Anthropology, Smithsonian Institution



図 11 栗時絵螺鈿火桶 (スミソニアン自  
然史博物館データベース)  
<http://n2t.net/ark:/65665/39307de39-e438-4fb6-9e3a-a61ee7c01196E324-0>, © Department of Anthropology, Smithsonian Institution

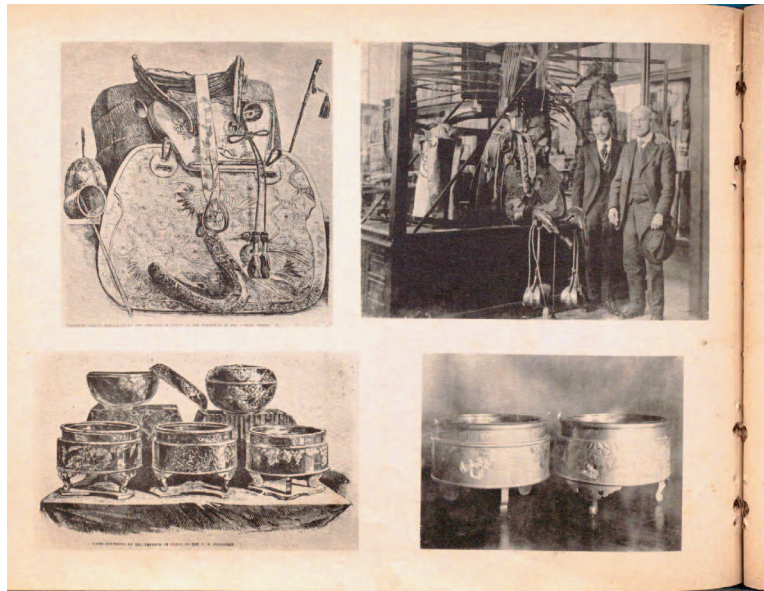


図 12 『万延元年遣米使節団図録』掲載の遣米使節団  
贈品と見られる資料 (国立国会図書館デジタルコ  
レクション)  
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1920856>

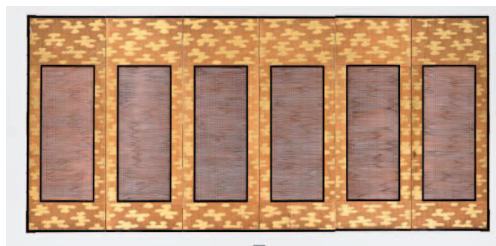


図 13 翠簾屏風 (スミソニアン自然史博物館データベース)  
<http://n2t.net/ark:/65665/37be3b36b-03a4-4314-8096-90cd89a71d0fE14166-0>, © Department of Anthropology, Smithsonian Institution

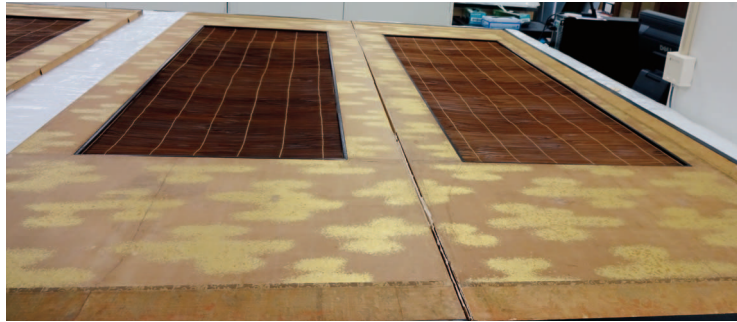


図 14 翠簾屏風（一部）（福岡撮影）



図 15 馬柄杓 (E14170-0) (福岡撮影)



図 16 馬柄杓 合の部分  
(E14170-0) (福岡撮影)



図 17 梅鶴蒔絵書棚  
(スミソニアン自然史博物館データベース)  
<http://n2t.net/ark:/65665/3fea109c1-cd5a-470b-8aaa-72a085024fe0>  
E14188-0, © Department of Anthropology, Smithsonian Institution



図 18 梅鶴蒔絵書棚 (福岡撮影)





図 19 馬具類 (E14190-0) (福岡撮影)



図 20 馬具類 拡大写真  
(鞍, 切付, 力革等) (福岡撮影)



図 21 馬具類 鞍 側面拡大写真  
(福岡撮影)



図 23 馬具類 三尺革など  
(福岡撮影)



図 22 馬具類 鞭 (福岡撮影)  
※上はフェルト製ブランケット



图 24 桐鳳凰蒔繪鞍 (E14191-0)  
(福岡撮影)

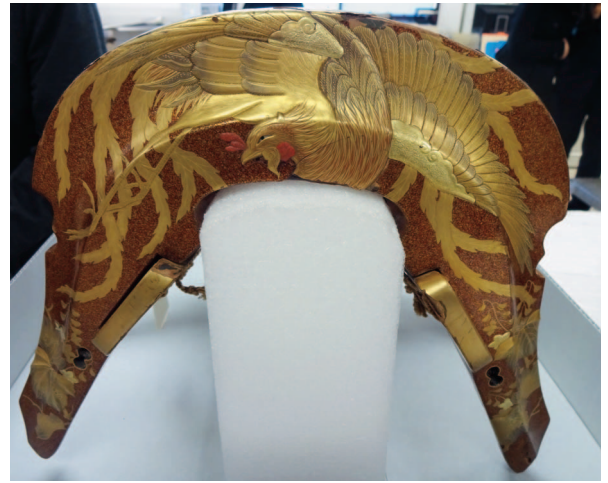


图 25 桐鳳凰蒔繪鞍(側面)(福岡撮影)



图 26 桐鳳凰蒔繪鐙 (福岡撮影)



图 27 桐鳳凰蒔繪鐙 拡大写真 (福岡撮影)



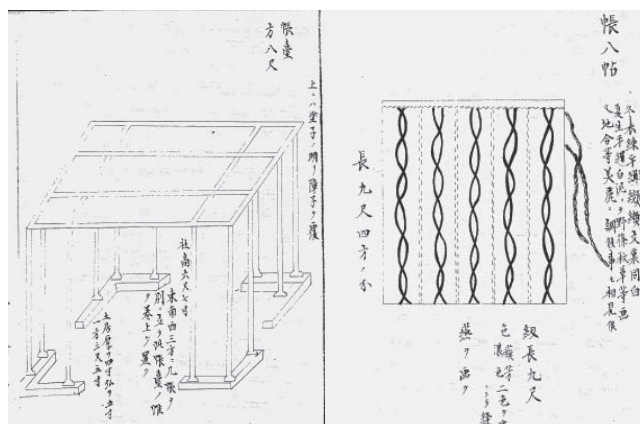


図 28 錦戸帳の図解

JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.B13090278200. 条約 / 新見豊前守等米国渡航本条約書交換一件 十六 (続通信全覧類輯之部修好門 153) (外務省外交史料館)

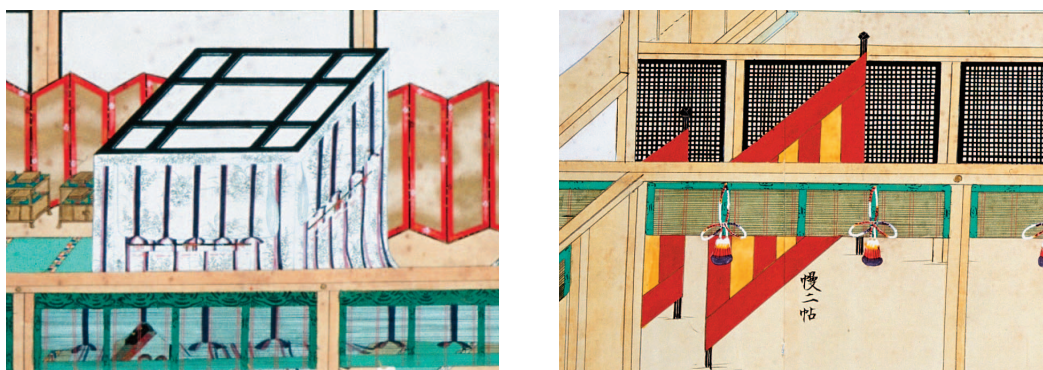


図 29・30 御帳・幔幕

(国立歴史民俗博物館蔵 H-528 『類聚雜要抄指図巻』)

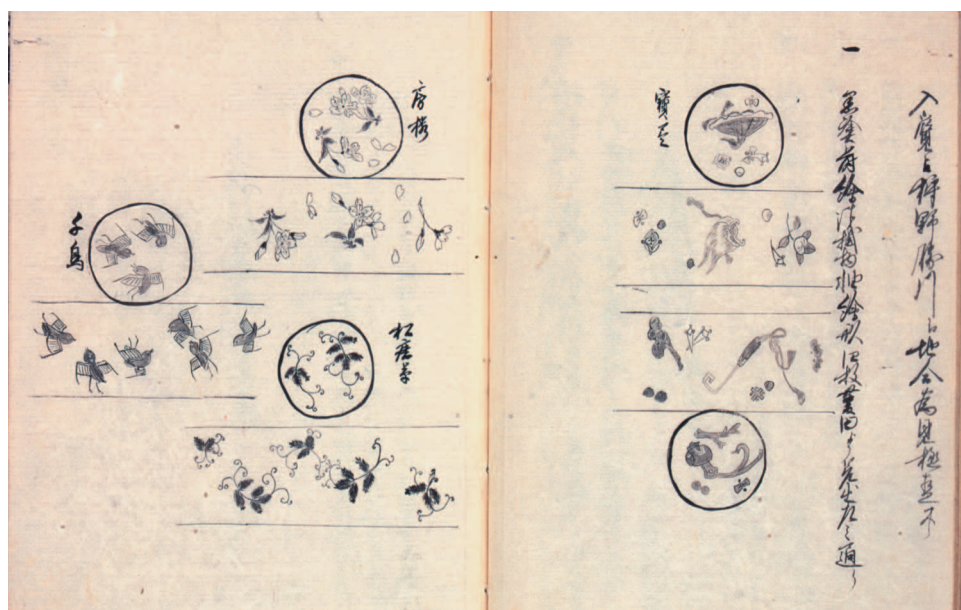


図 31 掛物軸の絵形案 (「宝尽」, 「房桜」, 「松唐草」, 「千鳥」)

(東京大学史料編纂所蔵「並行御用留」増進品之部)

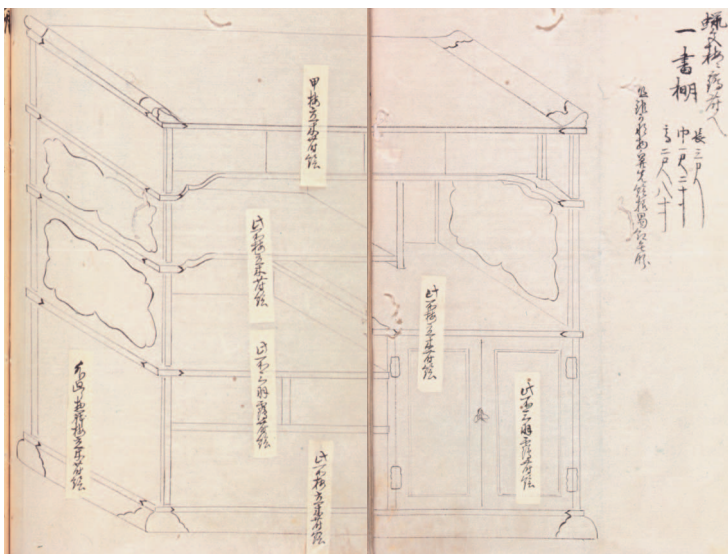


図 32 「蠟色梅二鶴蒔絵」書棚 絵形  
(東京大学史料編纂所蔵「垂行御用留」増進品之部)

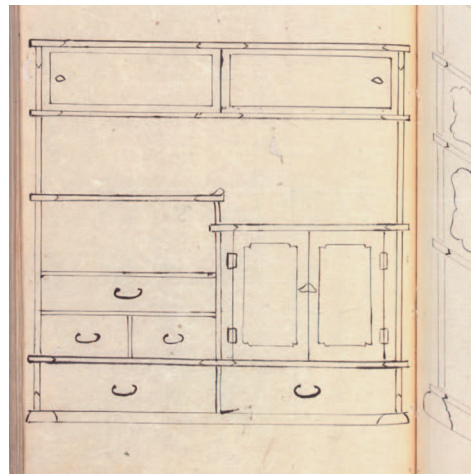


図 33 「惣体黒塗梅二鶴蒔絵」書棚 絵形 (同前)

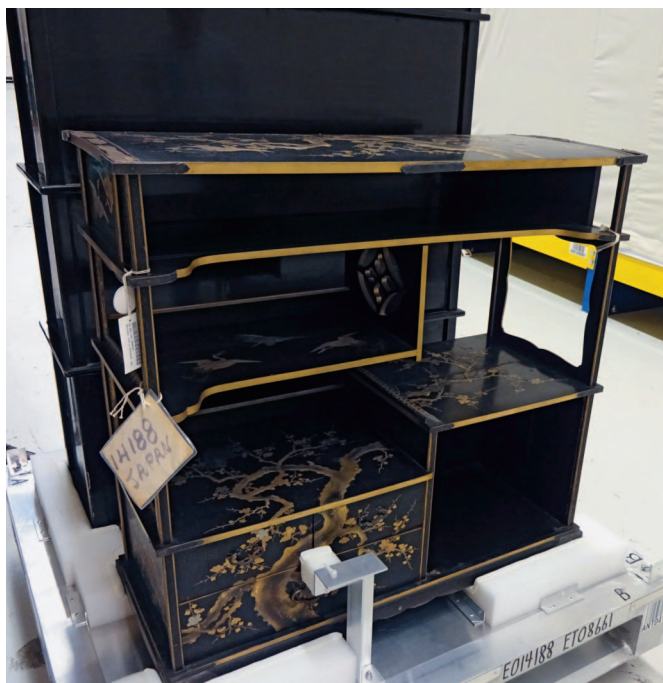


図 34 スミソニアン研究機構所蔵の梅鶴蒔絵書棚  
(E14188-0) (福岡撮影)



図 35 三尺革の絵形  
JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B13090277800. 条約／新見豊前守等米国渡航本条約書交換一件 十五 (続通信全覧類輯之部修好門 152)(外務省外交史料館)